

130 大雄院〔だいゆういん〕

表130-1

寺院名	廣澤山大雄院	所在地	桐生市広沢町3-3580
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 大雄院
主本尊	釈迦如来	仏事	元朝祈祷(修正会 1/1~3)、幸運祭(馬頭観音祭 1月第2日曜日)、涅槃会(2/15)、春明彼岸中日法要、花祭(4/8)、孟蘭盆会(8/13~16)、灯籠流し(8/16)、大施食会(秋彼岸)、大般若祈祷会、成道会(12/8)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	鎌倉時代源姓廣澤氏が現在地より北西の「岡上入口」付近に廣澤山大王院として建立(『山田郡誌』)。この大王院を前身とし、天正11年(1584)由良家家臣藤生紀伊守晋久を開基、沼田舒林寺第7世日榮春朝大和尚を開山とする(『新田正伝記付録』、『群馬県寺院明細帳 山田郡』、『桐生市史別巻』)。		
文化財指定	大雄院山門(市重文 平成3年4月)、刺繍涅槃図(県重文 昭和38年1月)		

位置・配置 (図130-1、写130-1)

大雄院は、桐生市広沢町3丁目、八王子丘陵最高峰 茶臼山麓、桐生の街を南から見下ろす高台に位置する。山門を望みながら、参道を北から南に向い石段を上ると山門が目の前に聳えている。その奥の石段を数段上ったところに、正面7間、側面10間の大伽藍、平成16年(2004)に完成の本堂である。本堂右脇には、大邦閣と呼ばれる客殿、庫裡と続く。左側には水屋、浄行堂、六角堂、三重塔、観音堂が大雄池を囲むように置かれる。山門の左脇には鐘楼



写130-1 境内全景

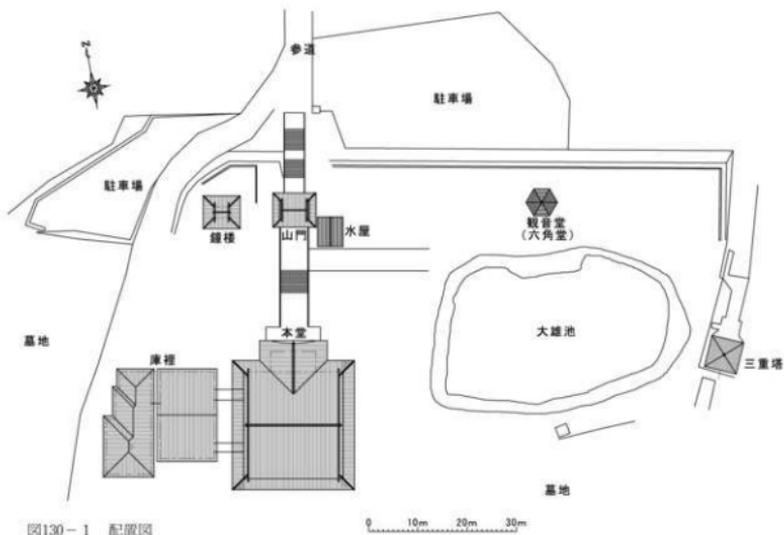


図130-1 配置図

が置かれる。大雄池と本堂の南側は斜面となり、大半を墓地、その奥は茶臼山へと連なっている。平成8年(1996)～16年(2004)にかけて境内の大々的整備を行なった。尚、近年禅林の修行道場として本山(永平寺、総持寺)より「随時建法幢格地」の指定を受け、地域宗門の重要な役割を果たしている。

由来および沿革

鎌倉時代この地を納めていた源姓廣澤氏が現在地より北西の「岡の上入口」付近に廣澤山大院を建立したと伝えられている。この大院を前身とし、天正11年(1583)由良成繁家臣藤生紀伊守善久を開基とし、上州沼田舒林寺第7世日栄春朔大和尚を開山と、曹洞宗の寺院として再興した。延宝5年(1677)旧本堂建立、宝永2年(1705)「刺繡涅槃図」(県指定重文)寄進される。寛保3年(1743)中里新左衛門の寄進により山門建立、昭和38年(1963)本堂屋根替、昭和56年(1981)山門屋根修復工事、平成10年(1998)旧本堂解体工事、新本堂建築工事開始、平成11年(1999)山門移設と修復工事。平成16年(2004)本堂完成、その後三重塔完成。

山門 (図130-2、表130-2、写130-2～130-7)

『校割帳 広沢山』によると、寛保3年(1743)大雄院第6世綱洲規範大和尚の代、中里新左衛門の寄進100両を基金とし建立。3間1戸(正面3間、側

面3間)、入母屋造銅板葺、平入の楼門である。この形式の門は桐生市内では鳳仙寺山門と当寺の二つしかない。軸部は木太く造り、装飾を限定的に用い

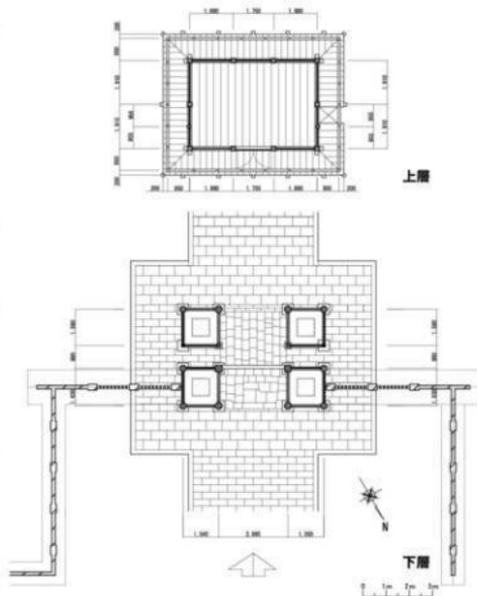


図130-2 平面図(山門)

表130-2 山門

建造年代/根拠	18世紀中期/建築様式	構造・形式	3間1戸楼門(6.08m)側面3間(4.20m)、入母屋造、平入、銅板葺(本瓦葺型)
工 匠	不明	基 礎	自然石切石(当初材)、独立基礎(改修時にPC杭、RC基礎施工下地)
軸 部	下層:丸柱4本、八角柱、角柱4本、地貫、腰貫、差鴨居、虹梁、頭貫 上層:角柱12本、床・内法長押、桁	組 物	下層:出三斗尖肘付木 上層:舟肘木
中 備	下層:出組、轟敷(中央部)、嵌込彫刻(龍) 上層:轟敷(外部1、内部2)	軒	二軒繁垂木(全周)
妻 飾	妻虹梁、轟敷、猪目懸魚	柱 間 装 置	下層:金剛柵 上層:両開舞舞戸、嵌殺格子志、腰紙板張
縁・高欄・脇障子	上層:四方廻縁、擬宝珠高欄	床	下層:石張、須弥壇板張 上層:式板張、縁切目板張
天 井	下層:床裏表 上層:化粧檼、化粧野地	須弥壇・厨子・宮殿	下層:四天王須弥壇 上層:なし
塗 装	素木、極彩色(彫刻)、白(木口)	飾 金 物 等	釘隠、岡木木口巻 丸に新田氏の家紋(大中黒一ツ引)
絵 画	なし	材 質	樺(柱、水引虹梁、繫虹梁、差鴨居、縁板、持込、縁葛)、松(床板)、松、樺(小屋梁)
彫 刻	下層:正面木鼻(獅子4眼球銅板嵌込)、梁上彫刻(臥龍)、東西轟敷(鶴、亀)、四天王像彫刻(持国天、広目天、増上天、多門天) 上層轟敷:外部(牡丹)、内部(菊、波)		

1. 本調査：寺院建築



写130-2 全景



写130-3 背面・側面



写130-4 側面



写130-5 繁垂木、葺股



写130-6 龍の彫刻



写130-7 鶴の彫刻

雄大な印象を与える建物である。新たに造られた本堂の大伽藍にも負けず、調和のとれた強い個性を持っている。山門中央の2本の柱には、眼球に銅板を嵌んだ獅子頭の木鼻が取り付け、中央の梁上には臥龍彫刻、両脇の葺股には鶴と亀の彫刻が施されている。4本の柱で囲われた須弥壇内には、東持国天、南増上天、西広目天、北多聞天像が配され、2面ずつ板壁、金剛柵で囲われている。出三斗実肘木付組物の詰組の構成は禅宗様の形式を伝えている。現状は後世の修理で柱などの材料が新材に交換されているが、細部は当初の部材を多く残している。大雄院の山門は、近世における広沢地区の発展と経済力の象徴と云える価値の高い建築物である。

まとめ

山門彫刻のうち、木鼻・葺股梁上彫刻の彫刻師

は、作風と時代から見て、初代石原吟八の可能性が高いと推定され、本堂内開山堂の須弥壇には、造工 高松又八郎邦口の墨書があることから、初代高松又八郎の作と考えられる。大修復された大雄院は、近近には比較の出来ないほど整備され、地域宗門の重要な役割を担ったものとなった。境内の環境や建物群を、必要なメンテナンスを行うことによって、守り続けることを願いたい。

(飯山 繁)

【参考文献】

- 『校割帳 広沢山』
- 『桐生市史別巻』桐生市史別巻編集委員会 昭和46年
- 『上野国寺院明細帳5』群馬県文化事業振興会 平成8年
- 『諸堂落成記念 廣澤山大雄院』記念誌編集委員会 平成16年

132 常広寺(じょうこうじ)

表132-1

寺院名	城山尖正院常広寺	所在地	桐生市新里町山上291
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 常広寺
主本尊	釈迦牟尼如来	仏事	先祖供養(11/第2土)
創立・沿革	不詳。本堂は、元禄元年(1688)9月3日火災で旧記録焼滅。享保4年(1719)僧焉再建する。大正12年1月1日夜火災のため焼失する。その後昭和5、6年(1930、1931)頃建立し現在に至る。ご本尊様の跡は昭和9年(1934)、昭和60年(1985)頃鐘楼建立(「新里村誌」)。		
文化財指定	常広寺の弁財天堂(市重文 昭和29年1月)		

位置・配置(図132-1、写132-1)

常広寺は桐生市西部の新里町山上に位置する曹洞宗寺院である。境内は戴沢川の右岸に南北に細長い形状で、境内西には一段高く山上城跡(県史跡)がある。境内南端の石柱から北に一直線の参道が伸



図132-1 配置図



写132-1 境内全景

び、山門さらに本堂が建つ。本堂北に開山堂、北西渡廊の先に八角堂、南に鐘楼、東に庫裡、南西に弁財天堂を配す。弁財天堂の南には庚申塔覆堂が並び、八角堂西には墓地が広がる。

由来および沿革

天正年間(1573~1592)智覚照元禅師の開山と伝わる。元禄元年(1688)9月3日火災で堂舎並に旧記録焼滅する。享保4年(1719)僧焉正および檀中により再建する。本堂は大正12年(1923)1月1日夜火災のため焼失する。その後昭和5、6年(1930、1931)頃再建し現在に至る。昭和60年(1985)頃鐘楼を建立する。

弁財天堂(図132-2、表132-2、写132-2~132-7)

弁財天堂の建造年代は、享和3年(1803)棟札(「群馬県近世社寺建築緊急調査報告書」に棟札の記載があるが、本調査でも棟札を確認できず不明)である。腰貫の線型木鼻の風触状況、渦の単純さ、水引虹梁木鼻(龍)が柱を巻き込みの形状からも19世紀初期の建築と推定される。

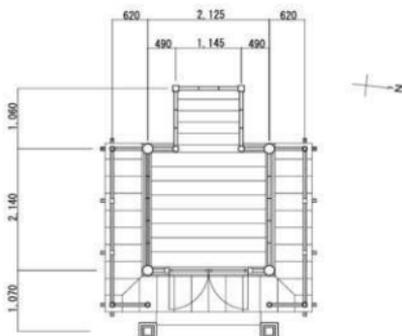


図132-2 平面図(弁財天堂)

1. 本調査：寺院建築

規模は正面1間、側面1間向拝1間付背面1間突出あり、寄棟造妻入鉄板葺(当初茅葺)である。切石積基壇、切石布基礎、向拝のみ木製礎盤となる。身舎は丸柱(椽)で向拝柱は角柱(几根面)である。組物は身舎に出組となり、中備は藁股である。浜緑から木階2級、擬宝珠高欄に三方切目縁を廻し脇障子なし。軒は二軒繁垂木で、背面突出部のみ一軒である。正面に棧唐戸、側面・背面は落込壁となる。

弁財天堂の特徴は、一間方丈の小堂であるが向拝軒支輪、身舎欄間に装飾された極彩色の彫刻および

天井、壁の絵画である。向拝天井には弁財天が描かれ、身舎天井に雲龍、壁に蓮が描かれている。雲龍には狩野派の流れをくむといわれる「法橋永春」の銘と「義信」の落款がある。須弥壇の前の丸柱(椽)は朱塗りされ、虹梁表面は金箔押しである。

弁財天は、元はインドの水の神様として祀られ、日本でも畿島をはじめ各地で水のそばに祀られている。弁財天堂も元は川に臨む位置に建てており、年代や理由は不明だが、現在地に移築されたとする説がある。

表132-2 弁財天堂

建造年代/根拠	19世紀初期/建築様式	構造・形式	正面1間(2.13m)、側面1間(2.14m)、寄棟造鉄板葺(当初茅葺)、妻入、正面1間向拝付、背面1間突出(檜皮葺)
工 匠	不明	基 礎	切石積基壇、上面漆喰、向拝のみ木製礎盤、切石、他自然石礎石
軸 部	[向拝]角柱 [身舎]丸柱、地・縁・内法長押、台輪	組 物	[向拝]なし [身舎]出組
中 備	[向拝]藁股 [身舎]藁股	軒	二軒繁垂木、平行垂木、背面突出部のみ一軒
妻 飾	なし	柱 間 装 置	両開棧唐戸、板壁落込
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、階2級	床	[外陣]拭床 [厨子]拭床
天 井	[向拝]鏡天井 [身舎]鏡天井	須弥壇・厨子・宮殿	[須弥壇]禅宗様須弥壇
塗 装	天井画・板壁・支輪：極彩色、須弥壇前柱：丹胡粉、虹梁：丹胡粉金箔、台輪：丹塗	飾 金 物 等	棧唐戸
絵 画	[向拝]天井画：天女 [身舎]天井画：雲龍(法橋永春)、板壁	材 質	檜、杉
彫 刻	[向拝]虹梁、木鼻、腰貫木鼻、肘木 [身舎]欄間(透彫)、波支輪		



写132-2 全景



写132-3 側面



写132-4 水引虹梁、木鼻



写132-5 向拝海老虹梁



写132-6 腰貫木鼻



写132-7 雲竜図(法橋永春)

まとめ

寺伝によれば、弁財天堂当初の建立年は元和8年(1622)6月19日とあり、享和3年(1803)に再建とする。再建時の棟札は今回も確認できていないが、今回の調査で明和9年(1772)4月(15世定輪光禪大和尚)、延享年間(17世準應惠海大和尚)、明治39年(1906)、昭和6年(1931)、4枚の棟札を確認した。「住職在職時年表」(住職提供)では、17世準應惠海大和尚の代(寛政2年5月～文政10年7月)(1790～1827)に弁天堂大修理とあることから、棟札の享和3年(1803)再建と符合し建造年代は妥当である。

4枚の棟札のうち、もっとも古い棟札は、「奉拜請辯財天堂十五童子東田面村 大工深沢平六 信丞 石工 万七 同 仁左□」とある。棟札の内容から十五童子に関するものであるか、石工の名前がある

ことから弁財天堂に関する棟札か、さらなる調査研究が望まれる。

弁財天堂は昭和29年(1954)1月に旧新里村指定有形文化財となる。弁財天堂脇には文化3年(1806)の銘が入る石造物があり、また、山門横の石碑堂内の須弥壇に安置されていた弁財天および眷属十五童子は、本堂で保管されている。

(南雲啓二)

【参考文献】

- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年
『新里村誌』新里村 昭和49年
『上野国郡村誌3 勢多郡(3)』群馬県文化事業振興会 昭和54年

133 善昌寺〔ぜんしょうじ〕

表133-1

寺院名	新光太平山 妙法院 善昌寺	所在地	桐生市新里町新川2728
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 善昌寺
主本尊	阿彌陀如来	仏事	御年賀受(1/1~3)、護摩供養(1/11)、涅槃会(2/15)、春彼岸(3/20)、花まつり弁財天まつり(4/8)、盂蘭盆会(8/13~16)、秋彼岸(9/22)、峯葉師秋大祭(10/22)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	大同元年(806)創立。初代省海大和尚が開基し大同寺と号す。延久3年(1071)10月火災により堂舎及び記録等焼失する。文治5年(1189)源頼朝堂舎を再建。元弘3年(1333)新田義貞の重臣船長門守入道善昌が没したことで善昌寺と称す。元龜2年(1571)世良田山長楽寺に属す(『群馬県史料集第八巻』、『上野国郡村誌3』、『上野国寺院明細帳1』)。		
文化財指定	善昌寺の五輪塔群(市重文 昭和46年10月)		

位置・配置(図133-1、写133-1)

善昌寺は桐生市西部の新川に位置する天台宗の寺院である。標高200mほどのなだらかな丘陵地の谷筋ある境内には、3箇所の湧水がある。境内南の門柱から参道を北上し、階段を上ると赤門、その先に



図133-1 配置図



写133-1 境内全景

本堂を構える。本堂西に書院、経蔵、弁天堂、南西に渡廊下で庫裏、南側に鐘樓を配す。本堂北側の一段あがった平地には、市重文の「善昌寺の五輪塔群」がある。

由来および沿革

「善昌寺縁起(応仁記)」によれば、大同元年(806)に伝教大師最澄が上野国に下向した際に、弟子の宥海が開基し、大同寺と称したとある。昌泰元年(898)焼失、以後7回落雷、兵火などにより焼失する。文治5年(1189)源頼朝は堂舎を再建する。元寇(弘安の役)(1281)の際には末寺末山31ヶ寺集合して祈願する。暦応元年(1338)越前藤島の合戦にて新田義貞が歿れると、その首級を重臣船長門守入道善昌が手厚く葬り、寺で生涯を終えた。大同寺は善昌にちなみ、善昌寺と称するようになる。徳川家光公により17石の朱印を賜う。僧侶の修行寺として栄える。

本堂(図133-2、表133-2、写133-2~133-7)

本堂の建造年代は「善昌寺縁起(応仁記)」より、寛政3年(1791)とする。規模は正面7間、側面6間の入母屋造平入で南面して建つ。間取りは標準的な六間取平面であり、本堂西の書院は延暦寺高僧の来院のために後補で設けられた建築という。

切石建ちの八角形柱(床上丸柱)、角柱を地貫、腰貫、頭貫、差鴨居、内法長押で固めている。三方切目縁を廻し、木階3級を付ける。外部は正面、側・背面の柱頭に舟肘木があるのみ、他は内法長押上を白壁としており全体的に簡素である。内部も簡素であるが、内外障壁の欄間彫刻、室境の欄間の板

表133-2 本堂

建造年代/根拠	寛政3年(1791)/[善昌寺縁起]	構造・形式	正面7間(15.08m)、側面6間(13.29m)、入母屋椽瓦葺、平入
工 匠	[彫師]彫刻師：勢多郡花輪村 石原常八(二代目) [絵師]欄間絵 絵師名解説不可	基 礎	コンクリート基礎、切石独立基礎
軸 部	[外陣]角柱、地貫、差鴨居、内法長押 [内陣]九柱、虹梁、頭貫、内法長押	組 物	[外陣]舟肘木 [内陣]出三斗
中 備	[内陣]幕般[外陣]嵌込彫刻	軒	二軒疎垂木、平行垂木
妻飾	燕懸魚鰯付	柱 間 装 置	ガラス戸、襖、明かり障子、白壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、階3級、手摺(後補)	床	[外陣]畳敷、中央部拭床 [内陣]拭板
天 井	[外陣]格天井 [内陣]椽縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	[須弥壇]禅宗様 [厨子]入母屋造妻入、正面唐破風付
塗 装	欄間、厨子、板支輪：極彩色欄間枠：黒	飾 金 物 等	なし
絵 画	板絵欄間(天女、十六羅漢、四天王、雅児)	材 質	樺、桧、杉
彫 刻	[外陣]虹梁 [内陣]虹梁、須弥壇、厨子、欄間(透彫り：龍、鶴と波)		



写133-2 全景



写133-3 背面・側面



写133-4 虹梁絵様



写133-5 内陣正面欄間彫刻



写133-6 厨子



写133-7 欄間板絵

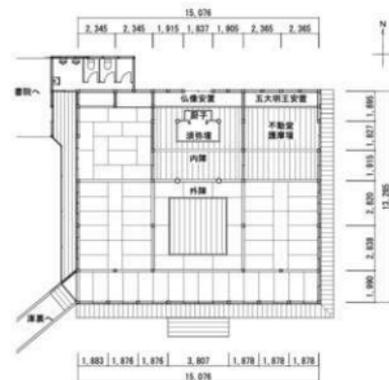


図133-2 平面図(本堂)

絵に善昌寺の特徴がある。寺伝の古文書によれば、欄間彫刻は二代目石原常八の作である。室境の欄間に架かる極彩色の板絵(仏、天女)は、明治16年(1883)の作(作者の銘、落款あるが未解説)である。

みやくしどう
峯葉師堂(図133-3、表133-3、写133-8~133-10)

本調査において、登梁に棟札が釘打ちされているのを確認したが、裏面の墨書は未確認のため棟札は建造年代の根拠とならない。そこで部材の風触状況、虹梁の絵様から18世紀中期と推定した。規模は、正面3間、側面3間の小堂で、方形造茅葺である。

切石土台に柱を建て、地貫と頭貫で固め、柱上の絵様肘木で桁を受ける。正面中央を引違腰舞良戸(火灯曲線)とし、西側面に入り用の片引板戸、側・背面は板壁である。

表133-3 峯葉師堂

建造年代／根拠	18世紀中期／建築様式	構造・形式	正面3間(3.78m)、側面3間(4.71m)、方形造茅葺
工 匠	不明	基 礎	基礎、切石基礎
軸 部	角柱、隅柱木鼻	組 物	舟肘木
中 備	絵様肘木	軒	せがいで造
妻 飾	なし	柱 間 装 置	腰舞良戸(花頭曲線)、板壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭床
天 井	現し	須弥壇・厨子・宮費	須弥壇(簡素)
塗 装	虹梁：黒	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧、杉、栗
彫 刻	[内部]虹梁 [外部]虹梁、絵様肘木		



写133-8 正面



写133-9 虹梁



写133-10 棟札



図133-3 平面図(峯葉師堂)

内部は1室で手前2間を外陣、奥1間を内陣とし、内陣に須弥壇を置く。天井は現し、四方白壁とした造りである。

まとめ

『群馬県近世寺建築緊急調査報告書』によれば、「天明年間(1781～1789)に建てられた仮本堂がそのまま残っている」とある。しかし、前掲の「善昌寺縁起(応仁記)」に「(中略)後、天明二年七月焼

失、寛政三年坊舎再建」の記述あり、数年の違いではあるが寛政3年(1791)と考えられる。

また、本堂内外陣境欄間彫刻に關した(石原)常八の覚書(発注者藤生善十郎へ正面3体の欄間彫刻の手付金証文)に壬7月12日とある。干支が「壬」としか記されていないため、石原常八が2代目常八主僧か3代目常八利信は判然としない。発注者藤生善十郎の分家独立(1832)から没年(1866)まで、2代目の引退および3代目の出世作を考慮して、善昌寺欄間は2代目常八作、覚書は天保13年(1842)作と考える。

欄間彫刻を奉納した桐原宿の藤生善十郎は、生糸商いで横浜にて財を築く。

(南雲啓二)

【参考文献】

- 『群馬県近世寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『善昌寺縁起(応仁記)』群馬県史資料集 第八巻 縁起篇(1) 群馬県文化事業振興会 昭和48年
- 『古文書』桐原宿藤生善十郎宛 花輪宿二代目石原常八の書付 寛政4年
- 『新里村誌』新里村 昭和49年
- 『上野国郡村誌3 勢多郡(3)』昭和54年
- 『上野国寺院明細帳1 東群馬郡 南勢多郡』群馬県文化事業振興会 平成5年
- 『大日本鑑蔵 上野名蹟図誌 四巻』昭和59年

134 善龍寺〔ぜんりゅうじ〕

表134-1

寺院名	能城山持明院善龍寺	所在地	桐生市新里町武井739
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 善龍寺 住職：第18世 米原祐尊
主本尊	阿彌陀如来	仏事	不動祭(6/第2日)、盆踊り(8/最終日)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	新川の善昌寺の隠居寺として寛永年間(1624~1643)に創建。正徳3年(1713)10月、大阿闍梨尊浄大和尚が中興開基する。明治12年まで第16世寺務を継続する。明治14年3月5日夜に全焼し資料も焼けたが、過去帳は残った。これまでに3回焼失。明治16年4月再建する。その後寺は荒れたが昭和2年に先代の住職が寺に入り再興(『新里村誌』、『上野名蹟図誌』、『寺院提供資料』)。		
文化財指定	善龍寺山門(市重文 昭和48年3月)、善龍寺宝篋印塔(市重文 昭和48年3月)		

位置・配置(図134-1、写134-1)

善龍寺は桐生市新里町武井に位置する天台宗の寺院である。鑄木川の左岸の懸崖上にある境内は、県道梨木香林線側から入り、北に本堂・庫裏、南に鐘樓、その先に山門を配す。明治34年(1901)7月の「能城山持明院善龍寺之景」によれば、当時鐘樓はなく庫裏は本堂西に配す。現在境内には福祉施設があるが、移転に伴い伽藍整備するという。



写134-1 境内全景



図134-1 配置図

由来および沿革

善龍寺は新川の善昌寺の隠居寺として、寛永年間(1624~1644)の創建となる。正徳3年(1713)10月大阿闍梨尊浄大和尚が中興開基する。明治12年(1879)まで第16世寺務を継続し、明治14年(1881)に全焼し宝物、資料等も焼けたが、過去帳だけは残った。その後寺は荒れたが昭和2年(1927)に先代の住職が寺に入り再興する。

山門(図134-2、表134-2、写134-2~134-7)

山門の建造年代は、頭貫の拳鼻や本柱肘木の絵様虹梁の絵様(渦、若葉)等の建築様式から18世紀前期とする。寺伝では、將軍家の菩提寺であった上野寛永寺の住職天海僧正(新川の善昌寺で修業)が、草津や伊香保への往来に立ち寄り、寛永寺と同年(寛永2年)開基なのに善龍寺には山門がないことを淋しく思い、寛永寺の裏門を移築したものと伝わる。

山門は屋根葺替え時(平成8年(1996))に3枚の棟札(安政6年(1859)4月、明治29年(1896)2月、

表134-2 山門

建造年代/根拠	18世紀前期/建築様式	構造・形式	1間1戸四脚門、切妻造銅板葺(当初茅葺)、東袖扉付、西袖扉通用門付
工 匠	頭貫上部の透かし彫りの龍：左基五郎(寺院提供資料)	基 礎	基礎切石石積、柱礎石方形加工石、礎盤木製
軸 部	本柱丸柱、控柱角柱、柱間虹梁架構、側柱間腰貫、正面背面木鼻錆渦紋	組 物	本柱控柱上出三斗
中 備	正面背面幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	笈形付大瓶東、拝蕪懸魚錆付	柱 間 装 置	両開き板戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	化粧垂木	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	なし	飾 金 物 等	飛燕垂木小口金具
絵 画	なし	材 質	檜、杉、松
彫 刻	正面背面虹梁上龍透し彫(上野寛永寺より移築)		左基五郎作と伝わる)

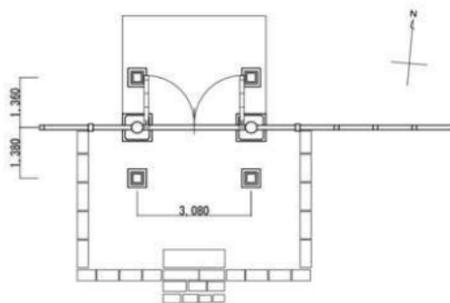


図134-2 平面図(山門)

大正10年(1921)11月)が見つかり、写真保存された後棟に納められた。安政6年(1859)の棟札には「家根師 茂木幸吉 同利平衛」、明治29年(1896)の棟札には「家根師 高橋源太郎 池上梅太郎」、大正10年(1921)の棟札には「大工職 松木策二郎 家根師 阿部三代吉」の工匠名がある。

規模は1間1戸四脚門、切妻造銅板葺(当初茅葺、後鉄板葺)で、門西側に通用門、その先に切妻屋根付板扉を配す。屋根は茅葺の形状に合わせた銅板葺きにより量感のある形状で、妻飾りに蕪懸魚を付す。軸組は切石礎石の木製礎盤に本柱(丸柱)を建て腰貫、頭貫(木鼻)、水引虹梁(木鼻)、冠木で固めている。

本柱(粽)、控柱(角柱)上の出組に虹梁、丸桁



写134-2 全景



写134-3 側面



写134-4 正面中備、幕股



写134-5 控柱木鼻



写134-6 虹梁大瓶東笈形付



写134-7 蕪懸魚錆付

を渡し繋ぎ虹梁（木鼻）でつなぎ、繋ぎ虹梁上に笈形大瓶束、大斗で棟木を支える。妻飾りは蕪懸魚鱗付で妻側をしめる。

樺による龍の透彫り（寺伝では左甚五郎作）は、本柱冠木と虹梁の間に収まる。

まとめ

善龍寺山門は旧新里村の重文として「善龍寺宝篋印塔」とともに昭和48年(1973)3月に指定された。本堂は火災に遭い3度焼失し、現在の本堂は明治16年(1883)4月の竣工である。当初茅葺で、昭和28年(1953)に瓦葺きに葺替え、平成4年(1992)に銅板葺きに葺き替える。

また、宝篋印塔は石工の出身地・名前（信州高遠

宮下伊八）が刻まれており珍しい。信州の石工は常広寺の石造物にも刻まれており、当時の交流がうかがえる。

（南雲啓二）

【参考文献】

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年

『新里村誌』新里村 昭和49年

『上野国郡村誌3 勢多郡(3)』昭和54年

『上野国寺院明細帳1 東群馬郡 南勢多郡』群馬県文化事業振興会 平成5年

『大日本宝鑑 上野名蹟図誌』昭和59年

『新里村の文化財 三訂版』平成6年、『新里村の文化財 四訂版』平成9年

136 醫光寺（いこうじ）

表136-1

寺院名	涌丸山瑠璃院醫光寺	所在地	桐生市黒保根町上田沢字涌丸326
宗派	高野山真言宗	所有者・管理者	宗教法人 醫光寺
主本尊	本堂：千手觀世音菩薩、薬師堂：瑠璃光薬師如来	仏事	厄除け縁日(1/4)
創立・沿革	弘仁11年(820)弘法大師により開山、保延年間中興開山、永禄6年(1563)火災により焼失、正徳5年(1715)薬師堂を延享4年(1747)本堂を再建した(寺縁起による)。		
文化財指定	虚空蔵菩薩像(県重文 昭和48年8月)、紺紙金泥虚空蔵菩薩経(県重文 昭和48年8月)、医光寺本堂の影刻欄間(市重文 平成5年3月)		

位置・配置(図136-1、写136-1)

国道122号水沼から県道根利八木原大間々線に入り小黒川の橋を渡り、川沿いを西に入った上田沢字涌丸地区の溪谷を見下す高台にある。山門の手前右手に宝篋印塔が左手に地藏様がある。山門をくぐると、左手に本堂、その西方に庫裏を置く。その前に鐘楼。本堂の脇を直進し30段の石段を上ると正面に薬師堂がある。右手坂道を上ると薬師堂の脇に出る。さらに直進すると赤城神社がある。墓地は参道



写136-1 境内全景

のはるか手前の川沿いの道路から台地上ったところにある。もう一つの墓地は本堂の東方にある。

由来および沿革

当寺は高野山真言宗の寺である。寺縁起によると、弘仁11年(820)弘法大師により開山、保延年間、6世永厳僧都により中興開山、永禄6年(1563)火災により焼失、正徳5年(1715)薬師堂を延享4年(1747)本堂を再建した(寺縁起による)。山号の涌丸山は、弘法大師の薬師如来の御手から丸薬が湧き出し、病の人々を救ったことから名付けられたとされる。

本堂(図136-2、表136-2、写136-2~136-7)

建造年は棟札より延享4年(1747)である。大工棟梁は町田彌七郎 山田郡龍舞村、同人息 町田彌四郎 他10名である。正面を南に開く12間堂。正面12間、側面9間寄棟造り瓦葺き、屋根修繕前は草葺だった。

4間5間の内陣、手前に外陣、左右に座敷、さらにその外側に廊下がある。そしてその手前が廊下・土間となっている。本朝二十四孝の影刻欄間は極彩



図136-1 配置図

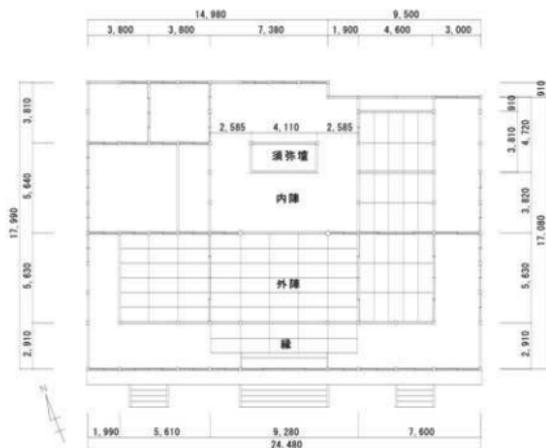


図136-2 平面図(本堂)

表136-2 本堂

建造年代/根拠	延享4年(1747年)/棟札	構造・形式	正面24.48m、側面17.99m寄棟造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]棟梁:町田彌七郎 山田郡能舞村同人 息 町田彌四郎	基 礎	べた鉄筋コンクリート
軸 部	[身舎]角柱、丸柱(内陣境柱、来迎柱)、長押、 頭貫	組 物	[身舎]舟肘木 [外陣]出組(正面) [内陣]出組(須弥壇上部)
中 備	[外陣]喜股(正面) [内陣]喜股(須弥壇上部)	軒	二軒葺垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	アルミサッシ、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	前方のみ 高欄なし縁(正面)	床	[外陣]畳敷き [内陣]拭板畳
天 井	[外陣]格天井 [内陣]格天井 [その他]竿縁 天井	須弥壇・厨子・宮殿	禅宗様
塗 装	素木、軸部 極彩色	飾 金 物 等	釘隠
絵 画	板戸の龍の墨絵(絵師 楽品亭)	材 質	不明
彫 刻	喜股、海老虹梁、水引虹梁、欄間彫刻		



写136-2 正面



写136-3 側面



写136-4 軒先・組物



写136-5 廊下



写136-6 外陣・内陣



写136-7 彫刻欄間

1. 本調査：寺院建築

色で高肉透かし彫りの技法で作られている。また天井文輪に彫刻版支輪を用い見事である。旧黒保根地区で最古かつ最大の寺院建築。

昭和30年：草葺き屋根から瓦葺き屋根に改修。
平成23年：床改修、土間コン打設、鋼製束設置。

薬師堂 (図136-3、表136-3、写136-8～136-10)
建造年は伝承では正徳5年(1715)である。虹梁の絵様の建築様式より妥当であると考えられる。工匠は不明。正面3間、側面3間、入母屋1間向拝付に正面2間側面2間半の規模で不動堂が増築され一体と

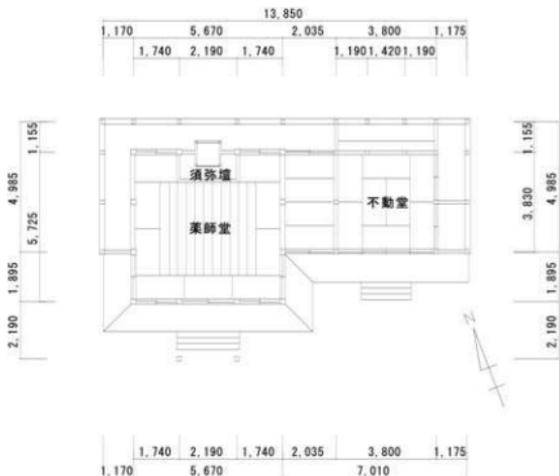


図136-3 平面図(薬師堂)

表136-3 薬師堂

建造年代/根拠	18世紀前期/建築様式	構造・形式	正面3間(5.67m)、側面3間(5.73m)、入母屋造、向拝1間、瓦鈿鉄板葺(当初草葺)
工 匠	不明	基 礎	自然石玉石
軸 部	[身舎]角柱、地長押、長押、頭貫 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]平三斗 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]嘉般(彫刻入り) [内部]撥束	軒	二軒繁垂木
妻 飾	木連格子	柱 間 装 置	アルミサッシ 金属サイディング、板張り
縁・高欄・脇障子	四方木口縁	床	拭板
天 井	格天井、竿縁天井(4帖間)	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	水引虹梁、嘉般、木鼻		



写136-8 正面



写136-9 側面



写136-10 内部

なっている。外部建具、西面・北面・東面の外壁は金属サイディングに改修されている。元の薬師堂に須弥壇（厨子造付け）があり、東に増築した不動堂と1室となっている。薬師堂は瑠璃光薬師如来を本持仏とし1月4日の厄除け縁日は多くの信者が礼拝する。昭和10年(1935)草葺屋根を亜鉛鉄板で包んでいる。

山門 (図136-4、表136-4、写136-11~136-13)
建造年及び工匠共不明。3間1戸の薬医門、裏側および側面に壁を設置することで、構造的補強をしている。

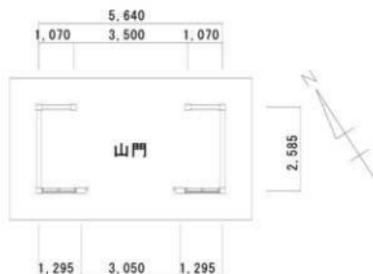


図136-4 平面図(山門)

建造年代は年代指標を欠くが比較的部材が小さく簡素であるため、19世紀中期と判断する。正面中央の2本の柱に薬座が残っているのも、元は門扉があったことがわかる。元は草葺屋根、現在は瓦葺きとなっている。

まとめ

山号の涌丸及び地名、瑠璃という院号、醫光寺の寺名を持つように薬師如来に関する寺であり、また赤城山東部に位置し小沼の東にもあたり神仏習合、赤城神社の別当寺であったことから（境内に醫光寺赤城神社もある。）小沼の神の虚空蔵菩薩を伝えている。旧黒保根村で最大で最古の寺院本堂である。寄棟平入り瓦葺き、向拝はなく、舟肘木の組物で落着いた外観。内部外陣、内陣共格天井のみで彩色面はない。欄間の極彩色高肉透彫り二十四孝の彫刻は見事である。棟札：延享4年(1747)、欄間裏墨書：寛延3年(1750)、宝暦3年(1753)から、18世紀中期における地方寺院本堂の彫刻及び彩色化を知る上で貴重である。

(荻野 浩)

【参考文献】

『黒保根村誌 別巻三 黒保根の民家・社寺建築』黒保根村誌刊行委員会 昭和63年

表136-4 山門

建造年代/根拠	19世紀中期/建築様式	構造・形式	3間1戸の薬医門(5.64m)、側面1間(2.58m)切妻造、平入、瓦葺(当初草葺)
工	匠 不明	基	礎 敷石
軸	部 角柱	組	物 なし
中	備 なし	軒	一軒葺垂木
妻	飾 押齋懸魚、幕殺	柱 間 装 置	漆喰壁、木板張り、門扉(当初)
縁・高欄・脇障子	なし	床	土間コンクリート打
天	井 垂木・野地板表し	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗	装 素木	飾 金 物 等	なし
絵	画 なし	材	質 不明
彫	刻 木鼻、懸魚		



写136-11 正面



写136-12 妻面



写136-13 裏面

137 常鑑寺（じょうかんじ）

表137-1

寺院名	赤城山常鑑寺	所在地	桐生市黒保根町永沼326
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 常鑑寺
主本尊	聖観世音菩薩	仏事	施帆續法要修行（8/8）
創立・沿革	寺伝によると、応永の頃からの小庵を開祖慶陽和尚が永禄の時一寺を建立して常鑑寺と号した（明治34年縁起）。		
文化財指定	常鑑寺の梵鐘（県重文 昭和48年4月）		

位置・配置（図137-1、写137-1）

国道122号桐生市役所黒保根文所前から県道根利八木原大間々線を300m入ったところから百数十段の石段の参道がある。参道入口付近には、二十二夜様や寺院名を刻んだ石柱を置き、約80段登ったところの東に庚申塔、西に三界様を、また少し登ると両



写137-1 境内全景



図137-1 配置図

側に灯笼、左右に3体ずつの六地藏がある。参道を登りきると境内が開ける。本堂裏手斜面を上ると上野の台地が広がる。参道からみて、正面に南を向いて本堂、右手に庫裏、左手に鐘楼がある。その奥に座禅堂、仏具収納庫がある。墓地は参道西側と庫裏東側の2か所ある。

由来および沿革

当寺の創建は、応永の頃(1394~1428)小庵が結ばれ日泉宗明和尚、月禅祖真和尚、玖山元良和尚など数代が相続したが、中葉に廃寺となった（寺伝より）。

永禄の頃(1558~1570)当寺の本寺膳村滝源寺五代住職春翁慶陽和尚が退隠し庵地に一寺を建立し常鑑寺と号し開山した。開基助力檀那は萩原与惣左衛門と伝えられており、当寺墓地に墓がある（「黒保根村郷土誌」より）。

本堂（図137-2、表137-2、写137-2~137-7）

建造年は棟札より安永元年(1772)である。工匠は棟梁儀八、大工三郎右衛門、藤七、伊介、忠藏、清治郎、小八、勘六、治郎兵衛である。正面15.93m、側面14.50mの方丈形式で屋根は寄棟銅板葺、平入（1986年より）、修繕前はトタン葺（1971年か

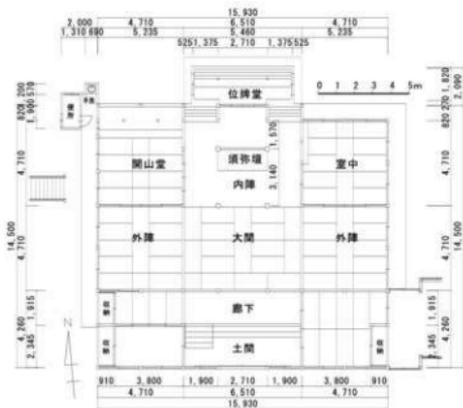


図137-2 平面図(本堂)

ら1986年まで)、草葺(1971年まで)である。軸部は基礎を自然石の切石、その上に土台を廻らし、柱は角柱、長押と貫で固め、組物は舟肘木、軒は一軒葺垂木としている。向拝は設けられていない。

平面は六間取りを基本とし、正面の一間通りを縁、手前の一間通りが土間であったことは、側面の出入口を埋めた壁から確認できる。縁・土の左右部分は居室に改造されている。内部の柱は来迎柱および内陣・大間境の4本を丸柱、他を角柱とする。組物は外陣・大間正面を出組、内陣正面を大斗肘木としている。天井は外陣・大間・内陣・とも格天井、他は竿葺天井、床は内陣が拭板、他は畳敷とする。彫刻は虹梁の刻線彫による唐草絵様、大間の4面、外壁の北面2か所に極彩色高肉透彫欄間が設けられて

いる。透かし部分の多い繊細な彫刻である。製作者は不明であるが関口文次郎の地元でもあり、何らかの関連があると思われる。

まとめ

常盤寺は400年以上続く伝統ある寺で、その本堂が建造されて250年近く経つ古希である。18世紀末期の禅宗の本堂建築の特徴を知ることができる建築である。東三十三観音霊場 一番札所となっている。
(荻野 浩)

【参考文献】

『黒保根村誌 別巻三 黒保根の民家・社寺建築』黒保根村誌刊行委員会 昭和63年

表137-2 本堂

建造年代/根拠	安永元年(1772)/棟札	構造・形式	正面15.93m、側面14.50m寄棟造、平入、銅板葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁、儀八 [大工]三郎右衛門、藤七、伊介、忠藏、清治郎、小八、勘六、治郎兵衛	基 礎	切石
軸 部	[身舎]角柱、丸柱(内陣、来迎柱)、腰、長押、貫	組 物	[身舎]舟肘木、虹梁 [外陣]出組 [内陣]大斗肘木
中 備	なし	軒	一軒葺垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	棧唐戸(引違い)、化粧棧入ガラス引違窓
縁・高欄・簾障子	高欄なし	床	[大間・外陣]畳敷 [内陣]拭板
天 井	[大間・外陣]格天井 [内陣]格天井 [他室]竿葺天井	須弥壇・厨子・宮窓	須弥壇(禅宗様)
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画	材 質	不明
彫 刻	[外部]虹梁 [内部]虹梁、彫刻欄間(極彩色高肉透彫)		



写137-2 正面



写137-3 側面・正面



写137-4 廊下



写137-5 大間から内陣を見る



写137-6 外陣から大間を見る
(高肉透かし彫刻欄間)



写137-7 格天井(絵画)

138 曹源寺（そうげんじ）

表138-1

寺院名	祥壽山曹源寺	所在地	太田市東今泉町165
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 曹源寺
主本尊	阿弥陀如来(阿弥陀三尊座像)	仏事	特になし
創立・沿革	文治3年(1187)新田義重により養娘祥寿姫菩提のため祥寿院として建立。文安元年(1444)金山城主横瀬新九郎が同院に邸られ、その嫡子貞国により寺号を宗源寺として再興。寛政5年(1793)「祥壽山畧記」によると、文治3年建立の六角堂が在ったが、慶長年間火災に会い、諸堂が焼失したが、この六角堂だけが残った。この六角堂の本尊をこの寺の本尊とした。天保15年(1844)「曹源寺栄螺堂由緒」によると、その後廃された六角堂を再興したのが現在の「栄螺堂」であり、寛政10年(1798)の建立としている。嘉永6年(1853)火災により本堂を失ったため、栄螺堂を当寺の本堂とする。昭和52年屋根葺替、向拝屋根を入母屋造に改修した。		
文化財指定	曹源寺栄螺堂(国重文 平成30年12月)、曹源寺の名角塔婆(市重文 平成17年3月)		

位置・配置(図138-1、写138-1)

曹源寺は太田市北東部の東今泉に位置する「栄螺堂」と呼ばれる曹洞宗の寺院である。東側の市道を西に向かい、正面に山門（仁王門）、石畳の参道の奥に本堂（栄螺堂）が建つ。山門の南側には、鐘楼と手水場がある。本堂の北側には新田氏累代供養塔や太田市指定重要文化財の名角塔婆や、普門品供養塔、弥陀名号百万遍供養塔があり、境内にはその



写138-1 山門入口

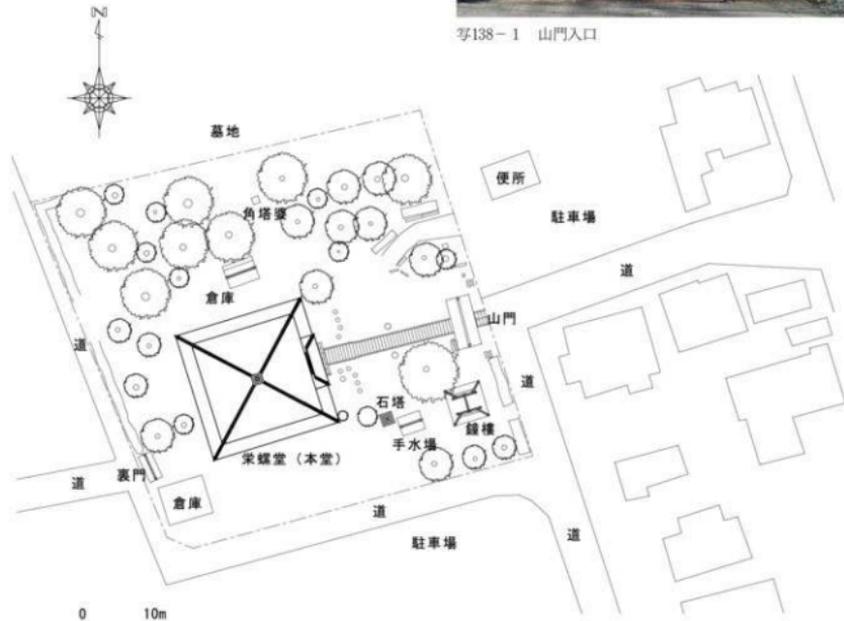


図138-1 配置図

ほか多くの石碑類が並んでいる。境内は東側の半分と南側、西側に道路が巡っている。西側の裏門は、昭和18年(1943)に解体された旧鐘樓の一部を転用したと伝わる。

由来および沿革

曹源寺は寛政5年(1793)の『祥寿山曹源寺畧記』によると、文治3年(1187)新田義重によって養娘祥寿姫菩提のために祥寿院として六角堂を建立したが、南北朝の動乱、新田氏の没落により、同院も零落した。その後、文安元年(1444)金山城主横瀬新九郎が同院に拝られ、その子 貞国によって寺号を曹源寺として再興したとされる。又、慶長年間の火災により諸堂が焼失したが、六角堂だけは残り、此処の本尊を当寺の本尊とした。『曹源寺采蝶堂由緒』〔天保15年(1844)〕によると、その後廃された六角堂を再興したものが現在の采蝶堂であり、本寺の本堂とし、寛政10年(1798)の建立としている。昭和52年(1977)屋根葺替、向拝屋根形状を入母屋造と改修し、群馬県指定重要文化財指定。平成30年(2018)保存修理工事完了後、国指定重要文化財として指定された。

ほんだう さいどうどう
本堂「采蝶堂」(図138-2、表138-2、写138-2～138-7)

曹源寺の本尊は阿弥陀如来(阿弥陀三尊像)であるが、現在は秘仏とされ、采蝶堂の本尊は「魚藍観世音菩薩」である。宝暦3年(1753)坂東上州新田秩父34番札所奉歌記では、第24番札所となっている。1階正面の本尊脇から須弥壇を右側に34体の観音像に沿って一回りし、そのまま階段を上ると2階へ出る、同様に33体の像を巡ると3階へ、更に33体の観音像を拝観し、手摺に沿って進み、階段を降り、そのまま進むと出発点の本尊脇に戻って終わる。一方通行で同じ通路を二度通らないし、また通路は交差しないのである。多数の仏像を一堂内に安置し、しかもその一つ一つに順次個別に拝礼できる仏堂形式である。本寺の大工棟梁は龍舞村 町田兵部栄清で、関東大工の祖と云われている。副棟梁は矢島村 野口源左衛門栄政である。

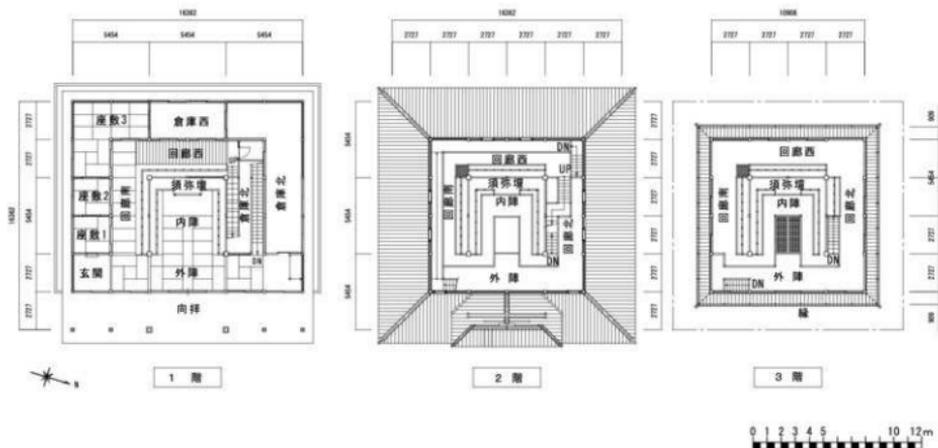


図138-2 1-3階平面図(本堂)

表138-2 本堂「栄螺堂」

建造年代／根拠	寛政10年(1798)／曹源寺栄螺堂由緒	構造・形式	正面16.36m、側面16.36m、3階建裳階付、方形造、向拝1間入母屋造、瓦葺
工 匠	創建時 [大工棟梁]町田兵部栄清、副棟梁野口源左衛門栄政 [彫工]関口文次郎 整備事業時 文化財保存計画協会 [大工棟梁]横地建匠	基 礎	[身舎]石場建自然石独立基礎 [向拝]持型礎盤花崗岩 [裳階部分]鉄筋コンクリート布基礎
軸 部	[主柱]角柱、庇柱 [裳階柱]角柱 [向拝柱]地紋彫几帳面取、礎盤付 [土台]裳階のみ [身舎]地貫・床貫・腰貫・内法貫 [裳腰階]貫、構造用合板	組 物	[向拝]大斗下皿斗付連三斗、舟肘木
中 備	[向拝]嵌込彫刻(水引虹梁上部)	軒	一軒半繁種
妻 飾	なし	柱 間 装 置	4枚引分棧唐戸、引違格子付舞良戸、引違上部波欄間付舞良戸、板襖、引違縦格子硝子窓、引違硝子戸、嵌殺窓、花灯窓(嵌殺硝子戸付)、花頭窓(片引硝子戸付)
縁・高欄・脇障子	3階に四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[1階]板張、畳敷 [2階]板張、床格子 [3階]板張、床格子
天 井	[1・2階]根太天井 [3階]化粧小屋裏	須弥壇・厨子・宮觀	[須弥壇]1、2、3階中央に本尊観世音菩薩像を安置、本尊以外に、1階 34観音、2階 33観音、3階 33観音像を安置
塗 装	向拝水引虹梁墨塗装、内部手摺 朱色 3階須弥壇 樺彩色	飾 金 物 等	釘隠、間木口巻 丸に新田氏の家紋(大中黒一つ引)
絵 画	[1階]秩父34観音霊場姿絵 [2階]坂東33観音霊場姿絵、四国33観音霊場姿絵	材 質	柱(檜、杉)、水引虹梁、繫虹梁(檜)、差鴨居(松)、床板(松)、小屋梁(松)、縁板(檜)、持送(松)、縁繫(杉)、縁葛(杉)
彫 刻	中備虹梁上部彫刻(雲水龍丸彫)、木鼻彫刻(阿吽の猿、唐獅子)、虹梁・差鴨居に絵様彫、向拝水引虹梁(絵様)、吹放ち繫虹梁(絵様)、吹放ち差鴨居(絵様)		



写138-2 全景



写138-3 背面



写138-4 側面



写138-5 廻り廊下



写138-6 廻り廊下



写138-7 廻り廊下

まとめ

「栄螺堂」と呼ばれる仏堂形式は、百観音信仰を背景として関東・東北地方に限って存在する。平面プランから大別すると方形のものと六角形ものに分けられるが、本寺は方形のプランを持つ。我が国で最初に建てられ、現在は消滅した本所羅漢寺に建てられた栄螺堂と酷似している。方形の栄螺堂は関東地方に限られ、現存する物は3例に過ぎない。その中で曹源寺栄螺堂は規模も大きく、構造も最も優れたものである。建立後、何度か修復しているが、よく原型を保ち、傷みも少なく保存状況も良好である。今後さらに維持管理を行い、貴重で重要な本寺を守り、多くの人に伝えたい。

(飯山 繁)

【参考文献】

『曹源寺栄螺堂由緒』天保15年

『群馬県指定重要文化財 曹源寺栄螺堂保存修理工事報告書』平成30年

139 正法寺〔しょうぼうじ〕

表139-1

寺院名	脇屋山正法寺	所在地	太田市脇屋町甲562
宗派	高野山真言宗	所有者・管理者	宗教法人 正法寺
主本尊	観世音菩薩	仏事	聖観音像開帳(12年に1度、4月)、節分会(2月)、花祭(5月)、秋の彼岸朝参り(9月)
創立・沿革	脇屋山正法寺は古儀真言宗の寺で、山城国(京都府)醍醐寺開山の聖宝が東国遊化の際に、源經基の請願を受けて延喜年間(901~923)に開山し、古くは萬明山聖徳院聖宝寺と呼んだと伝える。後に脇屋義助の法名の正法寺殿傑山宗英大居士により現在の寺名に改められたという(寺伝)。		
文化財指定	正法寺の仁王門並びに仁王尊(市重文 平成17年3月)、聖観音像(県重文 昭和29年3月)		

位置・配置(図139-1、写139-1)

正法寺は太田市の金山の西に位置する。当寺は、「脇屋山正法寺」と称し、鎌倉時代に金山の西にあった新田荘の郷の一つ由良郷の脇谷村(現脇屋)の地名に由来する。当寺にゆかりのある脇屋義助もこの地名を氏とした。東側の道路から参道を進み、山門(仁王門)を潜ると正面に観音堂を見る。西に

収蔵庫を置き、北に客殿と庫裏、その手前に天明2年(1782)建立の観音堂験碑がある。観音堂の南に新田義貞の弟脇屋義助像が、奥には義助の遺髪塚があり、その並びに旧正法寺跡地(観音免遺跡)から出土した「層塔」が置かれている。南には宝暦10年(1760)佐野天明の鋳物師大工丸山孫右衛門清光作の濡れ金仏地藏がある。境内は周囲に木々が生い茂り、西裏手の池から境内に水路が巡っている。



図139-1 配置図



写139-1 境内全景

由来および沿革

当寺は、元は東南の字中原(観音免遺跡)にあったと伝える。元暦年間(1184~1185)に新田義重が堂宇を修理し、元弘年間(1331~1334)に脇屋義助が脇屋村及び大般若経600巻を寄進したと伝え、脇屋氏の菩提寺ともなった。慶安2年(1649)には幕府から寺領9石1斗を授けられた。万治年間(1658~1661)に今の地に移り、本堂は文化4年(1807)脇屋村大火により焼失し、現在は観音堂を本堂としている。

山門に御神輿が保存されているが、以前は夏祭りの際に、旧正法寺跡地まで神輿を担いで練り歩いた。4月は観音様の登りを立て祭りをを行い、12年に一度、馬の年4月18日に聖観音像の開帳が行われる。この像は檜寄木造で鎌倉初期の作とされ県指定重要文化財である。

観音堂(図139-2、表139-2、写139-2~139-7)

正面3間(9.38m)、側面5間(11.18m)、入母屋造妻入銅板平葺である。正面に軒唐破風付の向拝を付ける。基礎は自然石とし、土台を廻さず柱を立てる。組物は外部を拳鼻付二手先尾垂木付、内部は拳鼻付出組とする。柱は粽付丸柱で外周部は直径を30cm、室内は直径40cmとし、内陣境の中央の2本の柱は小屋裏まで通す立のぼせ柱とする。

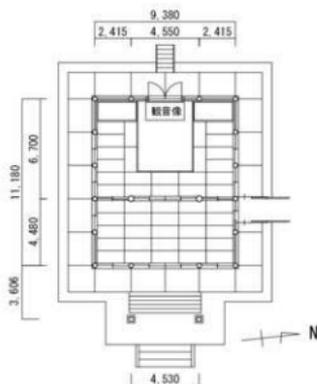


図139-2 平面図(観音堂)

平面は前方2間、奥3間の2室とし、四方に縁を回し正面向拝と背面に階を設ける。室境は中央に箴格子戸、袖を格子窓で仕切り、中央に見事な彫刻欄間を嵌める。内陣は奥に禅宗様の須弥壇を置き正観音像を祭る。前室側の柱は風食が見られることや、「上野名跡蹟図誌」の絵図も前室部分の建具が描かれていないことから、吹打であったと考える。

彫刻は虹梁の浮彫や刻線彫の唐草絵様、向拝の中備の嵌込彫刻、板支輪、葦股、木鼻、手挟、手肘木、力神、欄間彫刻等に施し、極彩色の痕跡がみられる。特に向拝の龍や唐破風の嵌込彫刻、物語を表現した内部の欄間彫刻は見事である。

建造年代を示す史料として、享和3年(1803)の棟札が2枚存在する。工事関係者を示す札と建築に至る経緯を示すもので、2枚合わせて取り付けられて

表139-2 観音堂

建造年代/根拠	享和3年(1803)/棟札	構造・形式	正面3間(9.38m)、側面5間(11.18m)、入母屋造、妻入、向拝1間軒唐破風付、銅板葺
工 匠	[大工]大工棟梁：武州埼玉郡鎌塚村 飯塚右衛門紀林 棟梁脇：新田郡歸郷 柿田米八政信、和田長五郎、加藤幸藏、赤石久藏、尾内富藏、杉之内 糸井円藏宗利、古戸村 江原喜右衛門、鶴生田邑 加藤兵藏、武州埼玉郡鎌塚村 小林銀次郎業敏、武州埼玉郡持田邑 瀬場定八忠儀、真彩色 蓮美伴次郎、関新田村 関塚文次郎、野邑 鹽野忠八/棟札	基 礎	自然石基礎、コンクリート基壇
軸 部	[身舎]丸柱(棕)、頭貫、台輪、長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手肘木、手挟	組 物	[身舎外部]二手先、尾垂木 [身舎内部]出組 [向拝]連三斗2段変形
中 備	[身舎]本葦股 [向拝]彫刻嵌込	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 飾	虹梁斗拱大瓶束笏形付、懸魚(猪目)	柱 間 装 置	[正面]舞良戸、ガラス戸 [側面]舞良戸、板壁、塗壁
縁・高欄・籠障子	四方大床(ALC下地モルタル)	床	畳敷
天 井	格天井、板支輪(彫刻)	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	[身舎]素木、朱塗(上部)、極彩色(彫刻支輪、本葦股) [向拝]素木、朱塗(上部、出組・海老虹梁)極彩色(手挟、唐破風嵌込彫刻)	飾 金 物 等	破風板飾金物、垂木小口
絵 画	なし	材 質	摩
彫 刻	[身舎外部]虹梁(絵様)、懸魚、板支輪(波)、本葦股(花鳥獣) [身舎内部]虹梁(絵様)、欄間彫刻(物語)、板支輪(波)、本葦股(花鳥獣) [向拝]海老虹梁(鳥浮彫)、水引虹梁(絵様)、中備(龍)、木鼻(獅子、猿)、手挟(牡丹)、手肘木(花)、力神、板支輪、兔毛通(飛龍)、力神、唐破風嵌込彫刻(唐子)		



写139-2 全景



写139-3 側面



写139-4 向拝



写139-5 正面 彫刻



写139-6 内陣 組物、中備



写139-7 内部 正面彫刻

いた。札には建物の名称はないが、「竪6間横5間餘之堂舎再建成就」と記され、規模から観音堂の棟札である。虹梁や木鼻の絵様、海老虹梁の形状、葺股の彫刻の特徴は江戸後期の特徴を示す。よって棟札に示す年代を堂宇の建造年代と考える。正面観音堂扁額は「玄龍」の銘があり、安永6年(1777)丁酉吉日に奉納されたもので、前進の建物に奉納されたものであろう。

山門 (図139-3、表139-3、写139-8~139-13)

当山門は3間1戸(8.43m)、側面2間(5.18m)入母屋造瓦葺平入の県内でも規模の大きな楼門である。柱は基礎石の上に立ち地貫、飛貫、頭貫で固め台輪を付け中備を撥束と斗拱とし、三手先の組物で高欄付の縁を支える。上層は二手先尾垂木付の組物、中備を撥束、蛇腹支輪の間を詰組とする。中央通路に直径2mの鯉口を吊し、両脇間に仁王尊を設置する。昭和28年(1953)に解体修理を行い、基礎の打直や、茅葺屋根を棧瓦葺に葺き替えている。

当山門は、年代を示す棟札等は確認できていないが、『明治42年宝物古器物古文書目録(新田郡)』に貞享年間(1684~1688)に建立、享和年間(1801~1804)に改築と記す。また、昭和63年(1988)に仁王

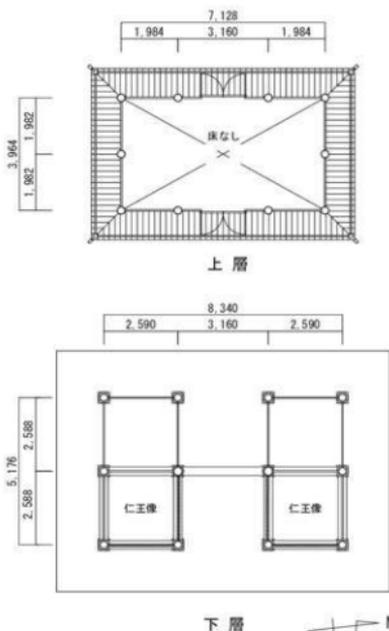


図139-3 平面図(山門)

表139-3 山門

建造年代/根拠	18世紀前期/建築様式	構造・形式	3間1戸楼門(8.43m)、側面2間(5.18m)、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 礎	礎石の上礎盤、コンクリート基礎(板壁下)
軸 部	[下層]丸柱、台輪、地貫、飛貫、頭貫 [上層]丸柱、長押、台輪	組 物	[下層]三手先、詰組 [上層]二手先尾垂木付
中 備	[下層]撥束、組物 [上層]撥束	軒	二軒繁垂木、蛇腹支輪
妻 飾	懸魚、虹梁大瓶束、力神中備	柱 間 装 置	板羽目
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	なし
天 井	板、格天井(鯉口上)	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	妻虹梁(渦、若葉)、懸魚、木鼻(渦)、妻中備(力神)		



写139-8 正面



写139-9 側面・背面



写139-10 下層 正面組物



写139-11 上層 組物



写139-12 妻飾



写139-13 木鼻 絵様

尊の解体修理を行った際、顔面裏側に作者の銘と制作年の貞享2年(1685)の墨書が確認された。当建物は太田市の指定では、仁王像の体内銘文の年代から山門も貞享年間の建物であるとしている。建物の年代を示す装飾の特徴として、下層の中備を詰組としていることから18世紀中期以降の様式もみられるが、柱貫に絵様を付けず、妻飾の虹梁の絵様は影も浅く渦と若葉のみとし、木鼻も渦模様の簡単な絵様であり、上層の中備を撥束とし、支輪を蛇腹支輪としていることから、17世紀後期から18世紀前期頃の様式もみられ、新しい様式と古い様式が混在している建物である。これらのことから当山門の建造年は細部の特徴から18世紀前期頃まで遡ると考える。

まとめ

観音堂は均整の取れた銅板平葺屋根と軒廻の彫刻や組物の美しさが目を引く。棟札も保存され、閑

わった棟梁の記載もあり、この地域における江戸後期の様式を知ることができる貴重な建物である。山門は17世紀後期から18世紀前期頃の様式がみられ、華やかな彫刻はないが、組物などの構造的な美しさが目を引く。18世紀前期もしくはそれ以前に建てられた貴重な楼門である。また、門両脇間に安置された仁王尊は見事な彫刻の像で、京都の大仏師左京入道法眼康祐の作である。仁王尊は山門(仁王門)と共に太田市指定文化財に指定されている。正法寺は新田氏とゆかりが深い古刹であり歴史的にも重要な寺院である。

(小林則子)

【参考文献】

- 『正法寺とその周辺の文化財』太田市教育委員会
- 『明治12年 寺院明細帳』
- 『明治42年宝物古器物古文書目録(新田郡)』

140 長楽寺(ちょうらくじ)

表140-1

寺院名	世良田山眞言院長楽寺	所在地	太田市世良田町3119-6
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 長楽寺
主本尊	釈迦如来	仏事	護摩供養(1/3)、法要、彼岸会、他
創立・沿革	東国禪文化発祥の寺、承久3年(1221)徳川氏始祖の義季が開基となり日本臨済宗の開祖・栄西の高弟である栄朝を開山として創建され、栄朝は著れ高く世良田は全国の僧侶憧れの地となる。徳川家康が関東に入ると天海大僧正を住職に任じ、天海は天台宗に改宗しその復興にあたらせ末寺700余ヶ寺を擁する大寺院となる(太田市)。		
文化財指定	長楽寺の勅使門(県重文 昭和32年4月)、長楽寺三仏堂及び太鼓門(県重文 昭和57年4月)、長楽寺宝塔(国重文 昭和36年3月)、絹本墨画 出山釈迦図(国重文 昭和39年5月 県立歴史博物館収蔵)、紙本墨書長楽寺文章(115通)(国重文 昭和13年7月 県立歴史博物館収蔵)、絹本着色 荏荏天神像、絹本墨画淡彩 呂洞賓図、絹本着色 山王曼荼羅図、絹本着色 慈覚大師像、絹本着色 無準師範像、絹本着色 牧翁了一像、絹本墨画 葡萄図(伝日親筆)、絹本墨画 枯木図、絹本墨画 蘭圖(曾念筆)、絹本墨画 月湖観音像、絹本着色 十六羅漢図、紙本墨書 永祿日記、木造伝徳川義季像、木造法照禅師月船琛海像(県重文 昭和40年7月 県立歴史博物館収蔵)、絹本着色 律台宗像、木造伝徳川義季夫人像(県重文 昭和40年7月 新田荘歴史資料館収蔵)、絹本墨画 三十三観音像(県重文 昭和48年12月 県立歴史博物館収蔵)、長楽寺三仏堂三尊仏(本尊)木造阿弥陀如来坐像・脇侍)木造釈迦如来坐像(附 銘札1枚)・脇侍)木造弥勒菩薩坐像(附 観音經1巻)(県重文 昭和63年8月)、普光庵月船琛海墓所出土品 骨蔵器・蓋石(県重文 平成12年3月 県立歴史博物館収蔵)、新田荘遺跡(国史跡 平成12年11月)		

位置・配置(図140-1、写140-1)

太田市南西部端の世良田町に位置する。近隣には世良田東照宮・新田荘歴史資料館が存在し、他の史跡とともに新田荘遺跡を形成している。境内は東武伊勢崎線世良田駅より南に約2kmの位置にある。長楽寺の北側にある「総門」は東に開き、少し南に下がることと赤色の「勅使門」が東に開く。勅使門の西には蓮池があり中央の渡月橋を渡ると「三仏堂」が東に開く。三仏堂の西には南北に走る道路があり境内を二分している。道路を渡ると「太鼓門」が東に開く。さらに太鼓門を西に進むと鬱蒼とした境内の奥に「開山堂」が東に開く。開山堂の左手前に「文殊

山」と呼ばれる前方後円墳がある。古墳頂上には16基の石塔があり、その中の一つは国指定の宝塔である。境内北東の総門から西に参道が続き左手に三仏堂を見、境内を二分する道路を渡り小さな門を入ると平成17年(2005)に建て替えられた「本堂」が東に開く。本堂参道東には鐘樓、庫裏が位置する。

由来および沿革

長楽寺は、新田氏の祖新田義重の子徳川義季が、承久3年(1221)に日本に臨済宗を伝えた栄西の高弟栄朝を招いて創建した寺である。以後、新田・世良田氏の保護のもとで、顕密禪の三宗兼修の道場として栄える。江戸時代には、新田徳川氏を先祖であるとする徳川家康は、長楽寺を先祖の建てた寺とし、御朱印地100石を寄進し、天海大僧正に復興を命じる。天海は、3代将軍家光の日光東照宮大改修時に奥社拝殿を長楽寺境内に移築し東照宮を勧請する。また、宗派を天台宗に改宗し、長楽寺伽藍の整備を行う。家光は、神領200石を寄進し、長楽寺を別当寺とし、末寺が700を超える大寺院となる。



図140-1 配置図



写140-1 境内全景

開山堂 (図140-2、表140-2、写140-2~140-7)

開山堂は境内の西南奥に位置し、長楽寺を開山した栄朝禅師の像が祀られているところから、この名がある。建造年代は比較的装飾の進んだ虹梁の唐草絵様、脚の長い蕨股等以上の建築様式から19世紀前期

期の建造と推定する。正面を東に開き、正面3間、側面4間の方形造瓦葺で一間向拝付とする。身舎外部廻りは角柱を立て拳付平三斗を置き中備を蕨股とする。軒は二軒繁垂木とし正面は中央に開戸を置き

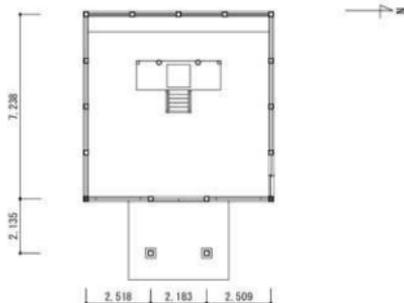


図140-2 平面図(開山堂)

表140-2 開山堂

建造年代/根拠	19世紀前期/建築様式	構造・形式	正面3間(7.21m)、側面4間(7.23m)、背面4間、方形造、一間向拝付、瓦葺
工 匠	不明	基 礎	切石
軸 部	[身舎]角柱、(来迎柱)丸柱 [向拝]角柱	組 物	[身舎]来迎柱上部：拳付平三斗 [向拝]出三斗変形
中 備	[身舎]蕨股 [向拝]蕨股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]開戸、火灯笼 [側面]引戸
種・高欄・脇障子	なし	床	土間
天 井	掉縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇、厨子
装 塗	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	水引虹梁(浮彫)、その他虹梁(刻線彫)、木鼻(獅子・象)、蕨股内部、正面扉		



写140-2 全景



写140-3 背面・側面



写140-4 向拝



写140-5 向拝虹梁



写140-6 正面扉



写140-7 内部須弥壇・厨子

両脇には火灯笼を置き、右側側面左手に引戸二枚の引違を構える。内部は一室で後方に円柱の来迎柱を置き、その両脇に角柱を立て簡易な須弥壇を備え入母屋造の厨子を安置する。来迎柱の組物は拳付平三斗とし、中備は藁股とする。天井は棹縁天井とし、床は土間とする。

三仏堂 (図140-3、表140-3、写140-8～140-13)

建造年については慶安4年(1651)の棟札があり、装飾化の進んでいない建築様式から慶安4年(1651)の建造と認められる。棟札には三代將軍家光が大旦那となって再造されたとわかる。隣接する世良田東照宮とともに元文元年(1736)から天保15年(1844)の間に5回の修理が行われ、明治9年(1876)に茅葺屋根から棧瓦葺に改められ、昭和59年(1984)に銅板葺

となり、昭和の大修理が行われた。全体を鮮やかな朱塗とし、正面を東に開き、正面5間、側面4間の

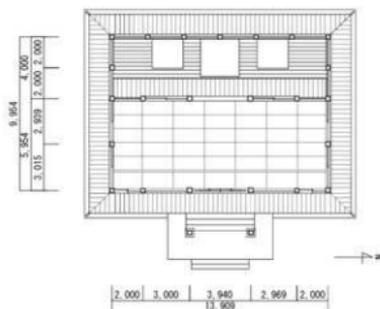


図140-3 平面図(三仏堂)

表140-3 三仏堂

建造年代/根拠	慶安4年(1651)/棟札	構造・形式	正面5間(13.90m)、側面4間(9.95m)、背面6間、寄棟造、平入、一間向拝付、銅板葺
工 匠	[大工]長谷河五兵衛 藤原重春 [鍛冶]長兵衛 惣時平	基	礎 切石
軸 部	[身舎]角柱、(来迎柱)4本丸柱 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎]内部：出三斗、外部：突射木
中 備	[身舎]藁股、内外陣境：間斗東 [向拝]藁股	軒	一軒半繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]開折戸、左右部戸 [側面]板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床	[外陣]畳敷 [内陣]板張
天 井	[外陣]棹縁天井 [内陣]棹縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(和様)、厨子
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	扉、釘隠
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	水引虹梁・海老虹梁(彫線彫唐草絵様)、手扶、木鼻		



写140-8 正面



写140-9 側面



写140-10 向拝



写140-11 向拝虹梁



写140-12 内部内陣



写140-13 内部：仏像

寄棟造銅板葺で一間向押付とする。身舎外部廻りは角柱を立て、実肘木とし中備を葦葺とする。軒は一軒半繁垂木とし正面は中央に開折戸を置き両脇には藪戸とする。四方切目縁を廻し高欄はない。内部は外陣・内陣の2部屋とする。内外陣境の柱は丸柱とし、中央間は開放とし、両脇間には格子引違戸とし、内陣には5間分の須弥壇上に三仏を置く。内外陣の天井は棟縁天井とし、内陣床は板張、外陣床は畳敷とする。長樂寺三仏堂三尊仏は寄木造の玉眼の漆塗金泥仕上げの座像である。須弥壇上の右から釈迦如来像(2.20m)・阿彌陀如来像(2.53m)・弥勒菩薩像(2.24m)が安置され、右から過去・現在・未来をあらわした三世仏とも呼ばれている(太田市誌)。修理時に発見された寛文10年(1670)の釈迦如来像胎内銘札によると建物は慶安4年(1651)に建造され、三尊像は寛文10年(1670)に造られた。三尊像の大きさに対して三仏堂の天井高さが大変低いのは、建造後に三尊仏が納められたためと思われる。昭和63年(1988)7月14日、群馬県重要文化財に指定される。

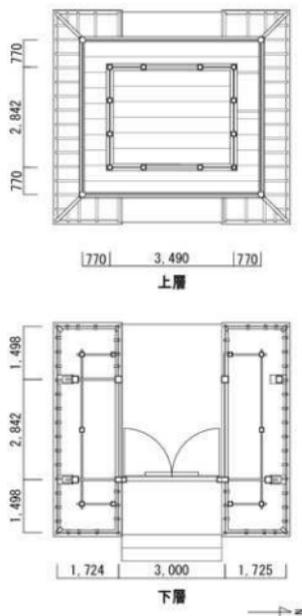


図140-4 平面図(太鼓門)

太鼓門 (図140-4、表140-4、写140-14~140-16)
建造年代の史料は確認できない。元元元年(1736)

表140-4 太鼓門

建造年代/根拠	17世紀中期/建築様式	構造・形式	楼門袴腰付、上層正面3間(3.49m)、側面3間(2.84m)、入母屋造、平入、銅板葺
工	匠 不明	基 礎	切石
軸	部 角柱	組 物	舟肘木
中	備 なし	軒	一軒半繁垂木
妻	飾 弧格子	柱 間 装 置	板張
縁・高欄・籠障子	四方切目縁、擬宝珠高欄付	床	拭板張
天	井 板張	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗	装 朱塗(内法長押下部壁面・垂木)、極彩色、黒塗(袴腰・柱・梁・桁・長押)、白塗(内法長押上部・屋根裏)	飾 金 物 等	
絵	画 なし	材 質	不明
彫	刻 [上部壁面]円形剣抜模様、火灯笼		



写140-14 正面



写140-15 側面



写140-16 上層部：四方大床

の世良田東照宮の棟札に「太鼓門」の名が記されていることから、この時期には既に建造されていたと考えられる。全体的に落ち着いた建築様式であることから旧本堂、三仏堂、世良田東照宮本殿のできた17世紀中期の建造と推定する。修理は三仏堂と一緒に昭和59年(1984)に昭和の大改修が行われた。銅板葺は寛政8年(1796)に東照宮拝殿、勅使門とともに檜葺を葺き替えたものであるという。形式は入母屋造の屋根銅板葺で平入であり、正面を東に開く楼門袴腰付の山門である。袴最下部の外縁部下部より階段にて2階へ登ることができる。袴最下部の外縁部正面(6.45m)側面(5.83m)、上層上層部は正面3間(3.49m)側面3間(2.84m)四方切目線により擬宝珠高欄付高さ30cmほどで囲まれている。内部の床は拭板で、壁は円形の柵り抜き模様のある板壁に囲まれており、天井は板張である。かつては楼上に太鼓をかけて時報や行事の合図に使用された。昭和63年(1988)7月14日群馬県重要文化財に指定される。

勅使門 (図140-5、表140-5、写140-17~140-19)

建造年代の史料を確認できないが、簡素な唐草絵様、成が高く肩が張り、脚の短い幕股などの建築様式から、当遺構の建造年代は17世紀中期頃と推定す

る。元文元年(1736)の修理棟札、宝暦13年(1763)以降の棟札では、東照宮の付属建物として徳川幕府により修理が行われた。勅使門は長楽寺三仏堂の門であったが、古くから東照宮の正門ともいわれていた。明治8年(1875)の神仏分離の時に長楽寺に属したものである。昭和30年(1955)報告書の写真資料により勅使門の屋根には草が生え、扉が傾いた姿を見て昭和時代に修理が行われたことが確認できる。勅使門が県重要文化財指定になったのが昭和32年(1957)であるので、その後到大修理が行われたと推定する。正面を東に開き、切妻造銅板葺平入で、1間1戸の四脚門である。軒を二軒半繁垂木、妻飾を虹梁大瓶束とし、柱は丸柱として三斗を置き、中備として幕股を配置する。正面に2枚の扉を設ける。勅使門は、世良田東照宮の正門として建造され、勅使または幕府の上使が参向するときだけに開

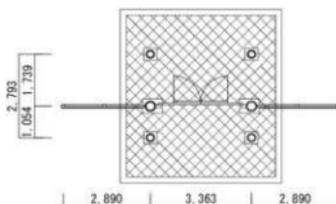


図140-5 平面図(勅使門)

表140-5 勅使門

建造年代/根拠	17世紀中期/建築様式	構造・形式	1間1戸の四脚門(3.36m)、側面2間(2.79m)、切妻造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 礎	切石
軸 部	丸柱	組 物	出三斗
中 備	幕股	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束	柱 間 装 置	なし
縁・高寛・脇障子	なし	床	四半敷風モルタル
天 井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	朱塗	飾 金 物 等	
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	虹梁・木鼻・肘木(刻線彫唐草絵様)、幕股彫刻内部		



写140-17 正面



写140-18 側面



写140-19 幕股

扉されたと伝えられることから「あかずの門」または丹塗で仕上げられているところから通称「赤門」と呼ばれている。

総門 (図140-6、表140-6、写140-20~140-22)

建造年代の史料を確認できないが、懸魚の彫刻、渦と唐草が一体となった唐草絵様、総摩造などの建築様式から建造年代は江戸末期と推察される。屋根葺替は平成18年(2006)頃(本堂が建て替えられる前:住職による)。正面を東に開き、切妻瓦葺平入、主柱2本と控柱2本からなる粟門形式をとる。軒を二軒半繁垂木、妻飾を虹梁大瓶東笈形付とし、柱は角柱として三斗を置く。正面に2枚の扉を設ける。

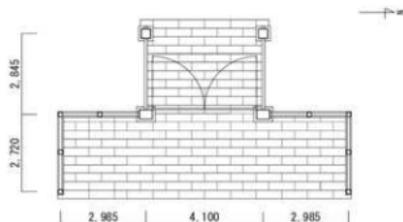


図140-6 平面図(総門)

表140-6 総門

建造年代/根拠	江戸末期/建築様式	構造・形式	1間1戸粟門(4.10m)、側面(2.84m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基礎	切石
軸 部	角柱	組 物	出三斗、拳付平三斗
中 備	なし	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶東笈形付、懸魚・桁隠	柱 間 装 置	なし
縁・高筥・脇障子	なし	床	敷石
天 井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	虹梁、木鼻、肘木(刻線彫唐草絵様)、笈形		



写140-20 正面:東面



写140-21 側面



写140-22 木鼻

まとめ

徳川発祥の地として家康は先祖建立の寺として保護をした長樂寺は、往時は末寺700寺の大寺院であった。本堂(太師堂)は平成17年(2005)に再建されたが、建造当時の三仏堂や太鼓門は大改修を行い、彩色がほどこされた往時の様式を保っている。また、境内の西奥にある開山堂は林の中に建立されて趣があり、東側道路に面する勅使門・総門も、江戸期の建築様式を残す歴史的建造物が多く残ってお

り、徳川時代の栄耀栄華をうかがうことができる境内となっている。

(荘司由利恵)

【参考文献】

『尾島町近世寺社建築調査報告書』尾島町教育委員会 平成10年

『長樂寺由緒略記』宗教法人長樂寺

141 (岩松)青蓮寺〔(いわまつ)しょうれんじ〕

表141-1

寺院名	岩松山義國院青蓮寺	所在地	太田市岩松町609
宗派	時宗	所有者・管理者	宗教法人 青蓮寺
主本尊	阿弥陀如来	仏事	日限地藏縁日 毎月4日14日24日
創立・沿革	寺伝に拠ると、新田氏、足利氏の祖である源義国(1091~1155)を開基、源祐律師を開山とし、現在地の東300mに一堂を建立とある。その後、「青蓮寺殿」と称された岩松政経の時代、弘安5年(1282)に時宗に改めたと云われる。15世紀末この地に隠居した岩松尚純は、ここを「義國院」と称した連歌の道場として、多くの文人と交流した。天正8年(1580)正親町院天皇の宸翰による「寺号額」を賜ったこと等から、この頃現在地に移転したと考えられる(『上野国寺院明細帳6 新田』、『上野国郡村誌15 新田郡』、『尾島町町誌通史編 上巻』)。		
文化財指定	紙本墨画岩松尚純像(県重文 昭和56年5月 県立歴史博物館収蔵)、青蓮寺の関引き給馬(市重有民 昭和59年12月 新田歴史資料館収蔵)		

位置・配置(図141-1、写141-1)

太田市(旧尾島町)の県道142号線「青蓮寺入口」から北へ200mに位置する。境内は、正面に山門、両脇に地藏尊、南東側に隣接して「岩松館跡公園」

を置く。門を潜り、参道の正面に本堂、東に渡り廊下を経て庫裡と続く。東側は南から、鐘樓、その西に石造多重塔、手水舎を置き、西側には薬師堂、その西、北に墓地、本堂西北に歴代住職の墓地を置く。主な石造物は、山門南道路内に日限地藏尊霊場の石柱、地藏尊像を山門前兩端に置く。参道から西に延びる通路奥に六地藏と石宮、寄附連名板西横に3基の庚申塔、供養塔、石仏、薬師堂北シベリア事変戦死者慰霊塔を置く。

由来および沿革

新田、足利両氏の祖である源義国を開基、源祐律師を開山とし、現在地東300mに一堂を建立とされる。当初律宗と云われているが、定かではない。弘安5年(1282)「青蓮寺殿」と呼ばれた岩松政経の時代、時宗に改めたとされる。16世紀に入り、下剋上により金山城主であった岩松尚純は横瀬(後に由良)に城を任せ、この地に隠居し、ここを「義國院」

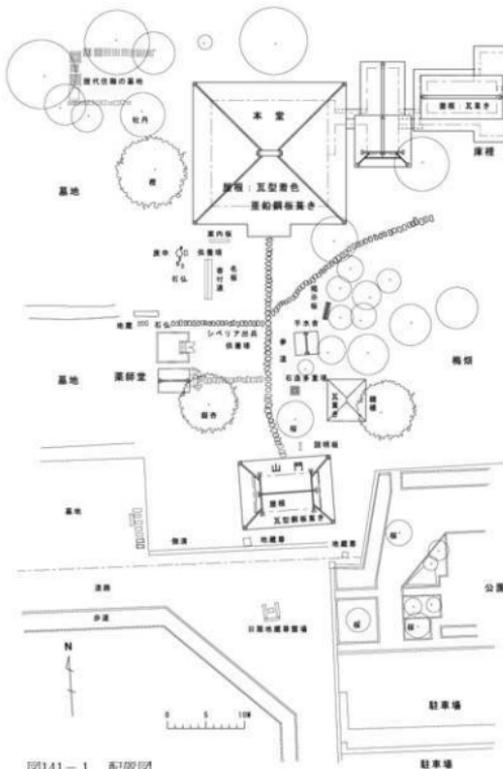


図141-1 配置図



写141-1 境内全景

とし連歌の道場とし、多くの文人と交流した。天正8年(1580)正親町院天皇から寺号の宸翰を賜ったことから、この頃現在地に移転したと考えられる。江戸時代になり、幕府から25石の朱印地を受け、明治まで続いた。廃仏毀釈の後一時無住となったが、大正2年(1913)以降は現在の状況である。尚、岩松新

田家は明治になり新田源氏の正統とされ、爵位を賜り「新田男爵」と称されている。

本堂 (図141-2、表141-2、写141-2～141-7)

建造年代を示す史料は確認されなかったが、建立当初は、柱がすべて角柱で、柱間が1間毎に細かく

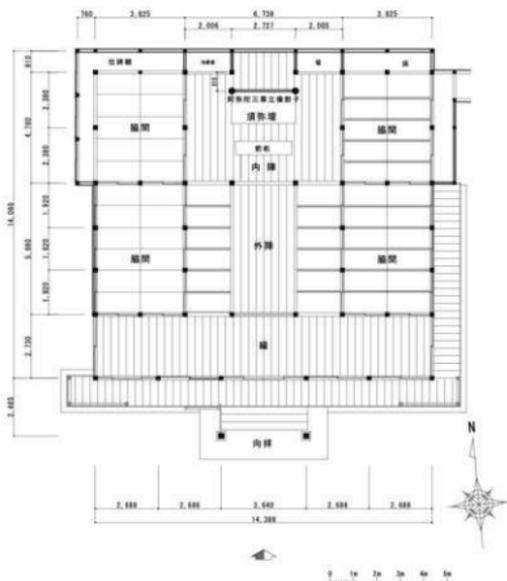


図141-2 平面図(本堂)

表141-2 本堂

建造年代/根拠	17世紀中期～後期/建築様式	構造・形式	角柱(正面14.38m、側面14.06m、寄棟造、平入、向拝1間2.48m、瓦型着色亜鉛鉄板葺)
工 匠	なし	基 礎	自然石独立基礎(石場建)一部に基礎
軸 部	[本堂]角柱 [向拝]角柱 [来迎柱]丸柱粽付 [内外陣境柱]角柱 [内部]内法長押 [外部]床長押・内法長押 [台輪]来迎柱上部のみ	組 物	[身舎]船肘木、来迎柱上部 出組実肘木付(一手先) [向拝]平三斗実肘木付
中 備	[向拝]水引虹梁に轟股、海老虹梁 [内外陣境]欄間上部に轟股	軒	正面側面共二軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	正面 硝子戸(2本溝)、東側面 硝子戸(3本溝)部板戸、西側面窓 アルミサッシ
縁・高欄・曇障子	[南・東面]切目縁木口隠釘、一部擬宝珠高欄	床	板張(縁、外陣中央部、内陣)、畳敷
天 井	棹縁天井 [外陣中央部天井]折上天井	須弥壇・厨子・宮殿	禅宗様須弥壇、前机、本尊(阿弥陀三尊立像)厨子、両脇厨子
塗 装	内部虹梁(朱、刻線部青)、欄間彫刻・轟股(極彩色)	飾 金 物 等	隅木木口(銅板巻)、垂木木口(銅板巻)
絵 画	なし	材 質	檜(角柱)、樺(来迎柱)
彫 刻	虹梁(刻線唐草絵様)、欄間・轟股(彫刻)		



写141-2 全景



写141-3 側面



写141-4 向拝



写141-5 向拝虹梁



写141-6 正面木鼻



写141-7 外陣

立つ、内外陣境欄間を除く小壁を、貫表し漆喰塗壁等のことから、17世紀中期～後期と推定される。現在、来迎柱は櫛材の丸柱、天井高も高くしているが、これは18世紀中頃の改修と考えられる。向拝部分も虹梁の絵様から、厨子の設置、白壁の改修（2枚の棟札による28代関牛、31代和遵の時代）も同時期と考えられる。当初茅葺であった屋根は昭和56年（1981）頃鉄板平葺としたが、その後平成20年（2008）代に、現在の瓦型着色亜鉛鋼板葺に葺き替えられた。

山門

山門（図141-3、表141-3、写141-8～141-10）

建造年代は明らかではないが、虹梁の絵様、天井画の作者等から、18世紀後半から19世紀初期と考えられる。山号額は誠仁親王（後陽成天皇の父）の御筆とされるのは、以前に門があったが、新たに建て替えられたと云えます。街道から望む淡い朱色に染まった楼門は、阿吽の仁王像と伴に静に参詣者を迎える。正面の差鴨居のような虹梁、中央の太版束の意匠、四方に巡る縁の上には左右火頭窓と正面の唐

表141-3 山門

建造年代/根拠	18世紀末～19世紀初期/建築様式	構造・形式	3間1戸楼門、正面7.02m、側面4.25m、入母屋造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 礎	独立基礎（自然石切石加工）、基壇（コンクリート打、縁自然石）
軸 部	主柱[下層]丸柱 [上層]丸柱 椋付内部八角落、長押 [上層]床長押、内法長押、台輪 [上層外側]半台輪 [下層]地貫・腰貫・内法貫・頭貫	組 物	[初層]出三斗実肘木付 [上層]出組実肘木付
中 備		軒	一軒・半繁垂木
妻 飾	家杖首	柱 間 装 置	[下層]両間軸吊板戸 戴座 [上層]火頭窓、嵌殺唐戸、引違縦舞良戸
縁・高欄・脇障子	[上層]四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[下層]土間コンクリート [上層]板張
天 井	[下層]板張、格天井 [上層]小屋裏裏表し一部棹縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	藁股・彫刻支輪（楕彩色）、尾棟（白象）、上層虹梁、頭貫、半台輪、組物（朱色）	飾 金 物 等	隅木、垂木木口 銅板巻、上層半台輪接手 真鍮一文字金物、下層扉 鉄製鏡頭金物
絵 画	[下層]格天井に天井画（硝子張）	材 質	摩（丸柱、虹梁）
彫 刻	虹梁・木鼻・実肘木（彫刻縁、絵様）、正面虹梁（鶴と松浮彫）、かえるまた・軒板支輪（厚内彫）、尾棟（白象彫刻）、真柱間虹梁（雷草刻彫）、頭貫・台輪（地紋入、一部菊紋入）、同台輪上部に「隅切角に三」の寺紋		



写141-8 正面



写141-9 側面



写141-10 天井絵画

戸、組物に支えられた軒と屋根、調和のとれた骨組み、工匠の力を感じる。下層格天井に描かれた天女の絵は、岩松義寄(温純)、孝純の作とされ、岩松新田家の文化の高さを示すものである。

まとめ

義重以来、この地域を治めた新田氏の系統で、足利氏に最も近い関係の岩松新田氏の地として、義国、政経、尚純、岩松新田家の名を戦国、江戸を経て残した。岩松青蓮寺、岩松八幡宮、岩松館跡、義国・尚純墓所等が群として残されていることで貴重である。中でも「岩松山義国院青蓮寺」は、規模が最も大きく、尚純の代(戦国時代)の都とのかかわりを窺うことが出来る貴重なものである。

(飯山 繁)

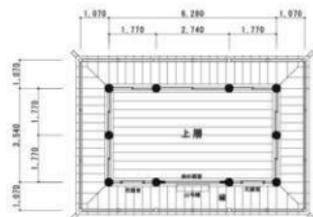
【参考文献】

『上野国寺院明細帳6 新田郡』群馬県文化事業振興会 平成9年

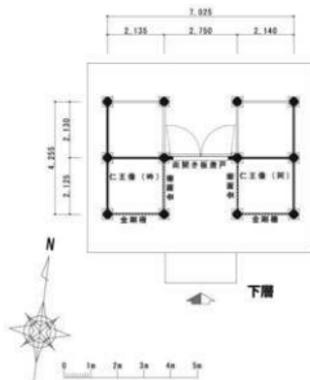
『上野国郡村誌15 新田郡』群馬県文化事業振興会 昭和61年

『尾島町誌通史編上巻』尾島町誌専門委員会 平成5年

『尾島町近世寺社建築調査報告書』尾島町教育委員会 平成10年



上層



下層

図141-3 平面図(山門)

143 明王院（みょうおういん）

表143-1

寺院名	谷籬山明王院安養寺	所在地	太田市安養寺町200-1
宗派	真言宗豊山派	所有者・管理者	宗教法人 明王院
主本尊	観木不動、御影木不動	仏事	元旦(1/1)、節分会(2/3)、不動様(3/27、28)、疫神除(6/28)、不動様(10/27、28)
創立・沿革	1061年後冷泉天皇の勅により、源頼義が開基となり奈良の興福寺から、招いた額空上人を開山として創建「寺伝」。その後、新田義貞(8代)が1333年後醍醐天皇の勅により七堂伽藍十二坊を有する大寺院として再建。		
文化財指定	新田荘遺跡(明王院境内)(国指定史跡 平成12年11月、平成21年7月(追加指定))、明王院の木造二天像(持国天立像・増長天立像)(市重文 平成25年5月)、明王院の石造薬師如来坐像(市重文 平成17年3月)、明王院の石造千体不動塔(市重文 平成17年3月)、明王院出土の源義助板碑(市重文 平成17年3月)		

位置・配置(図143-1、写143-1)

太田市の南西に位置し、境内南西に国道17号(上武道路)が近接する。

境内は南道路から北道路までと広い。南道路の石柱を進み、山門をくぐり、不動堂へと直線で配置されている。不動堂の東に千体不動尊供養塔が位置し、南東に手水舎、奥の鐘楼は令和元年(2019)9月調査時に建築中。西南に大師堂は位置し、その南に本堂等の建物が並ぶ。本堂は近年建て替えられた。不動堂の北東に、稲荷様・疱瘡神・薬師様、天神様が置かれ、それ以北は空き地になっており、西に墓地が広がる。



写143-1 境内全景



図143-1 配置図 全体

由来および沿革

康平4年(1061)後冷泉天皇の勅により、源頼義が開基となり奈良の興福寺から招いた頼空上人を開山として創建(寺伝)。その後、8代目新田義貞が正慶2年(1333)後醍醐天皇の勅により七堂伽藍十二坊を有する大寺院として再建。鎌倉時代の総領家規模の安養寺館跡に建てられた寺で、居住者は死後に「安養寺殿」と諡された新田義貞が有力。現在土塁や掘割は見られないが、国道17号建設前の発掘調査で一部確認された。

不動堂には、二体の不動明王が納められており、元弘3年(1333)新田義貞の鎌倉攻めの際、山伏に化

身した不動明王が越後方面の新田一族に一夜にして触れまわったと伝えられており、「新田觸不動」として広く知られる。

一時期は普門寺の門徒として天台修験寺であったが、元和(1615~1624)のころから総持寺の末社となり新義真言宗豊山派となった。

不動堂(図143-2、表143-2、写143-2~143-7)

建造年代は棟札より宝永2年(1705)。大工は、橋本五平衛である。

正面3間、側面5間、入母屋造、妻入、瓦葺、向拝1間付で、内部は下陣奥行2間、内陣奥行3間に

表143-2 不動堂

建造年代/根拠	宝永2年(1705)/棟札	構造・形式	正面3間(6.97m)、側面4間(8.90m)、入母屋造、妻入、向拝1間、銅板葺
工 匠	[大工]橋本五平衛	基 礎	基壇(切石・コンクリート)
軸 部	[身舎]丸柱、長押、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出組拳鼻付 [向拝]連三斗
中 備	[身舎]出組 [向拝]葦股	軒	二軒繁扇垂木、軒支輪(雲文様)
妻 飾	虹梁大瓶束、彫刻	柱 間 装 置	木扉、板扉、障子
縁・高欄・監障子	四方縁(発砲コンクリート・塗装)、擬宝珠高欄	床	板張、畳敷
天 井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(禅宗様)、厨子
塗 装	[身舎外部]朱塗、1部白・黒の彩色(軒支輪、木鼻、組物) [内部]黒塗・金襴巻(来迎柱、外陣内陣間柱)、襷彩色(嵌込彫刻)	飾 金 物 等	破風板、高欄地覆
絵 画	格天井	材 質	不明
彫 刻	[身舎]懸魚(三ツ花)、妻飾中備(鬼)、軒支輪(斜格子)、木鼻(拳鼻) [内部]嵌込彫刻(孔雀、鳳凰、天女、遊陵傾伽) [向拝]桁彫(三ツ花)、葦股(麒麟)、水引虹梁(唐草)、手扶(雲)、木鼻(獅子、象)、海老虹梁(唐草)		



写143-2 全景



写143-3 背面・側面



写143-4 向拝



写143-5 内部(厨子)



写143-6 欄間彫刻



写143-7 金襴彫刻

分かれる。身舎の柱は全て丸柱で、上部は粽である。外部は全体を朱色、一部に黒と白を使う。軒は二軒繁屑垂木で、妻飾の中備の鬼の彫刻は正面が赤鬼、背面が青鬼である。

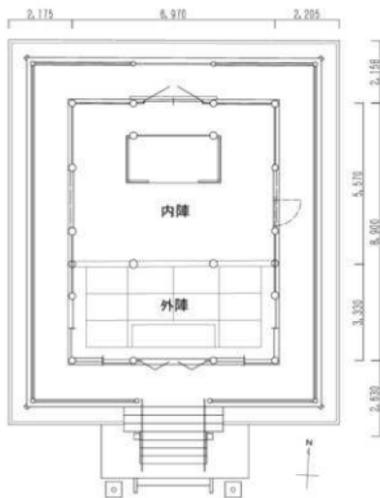


図143-2 平面図(不動堂)

向拝の虹梁、海老虹梁、手扶は刻線彫りで、海老虹梁の反りは少ない。中備の龕彫刻は麒麟である。

内部は、朱の柱に黒の内法長押、壁は漆喰壁。組物は、出組拳鼻付、柱の間には詰組がある。

外陣と内陣の間の丸柱、来迎柱は黒く上部に金襴巻がある。外陣と内陣間の欄間は鳳凰や天女、迦陵頻伽の彫刻で極彩色に彩られている。外陣格天井は龍の墨絵が描かれ、内陣格天井は煤の付着があるが、色鮮やかな花の絵が描かれている。

禅宗様の須弥壇に、大きな厨子がのる。須弥壇には牡丹と獅子の彩色彫刻があり、背面に色鮮やかな獅子が描かれている。また、寛保2年(1742)護摩釜、嘉永4年(1851)香炉がある。

緑の擬宝珠全てに、嘉永3年(1850)と寄進者の名が刻まれる。

二天門(ニテンカ図143-3、表143-3、写143-8～143-10)
建造年代は唐草絵様や落ち着いた建築様式より18世紀中期と推察。工匠は不明。3間1戸の八脚門で、丸柱に切妻屋根だが、天井は正面・背面それぞれに棟のある三棟造である。寺では二天門と呼ぶ。全体を朱色と白色で彩色する。

組物は正面と側面が出三斗、背面のみ平三斗に虹梁鼻が出ている。龕彫は天女、人・牛、鳥、花の彫

表143-3 二天門

建造年代/根拠	18世紀中期/建築様式	構造・形式	3間1戸八脚門(5.77m)、側面2間(3.51m)、切妻三棟造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 礎	基礎(切石・コンクリート)
軸 部	丸柱、土台(一部なし)	組 物	[正面・側面]出三斗 [背面]平三斗
中 備	龕彫	軒	二軒繁屑垂木
妻 飾	懸魚、二重虹梁大瓶束、龕彫	柱 間 装 置	板壁、ガラス(持国天・増長天象の安置部)
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	三棟造、垂木現	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	赤を基調に白と黒で彩色	金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	懸魚(龍)、降懸魚(花)、龕彫(天女、人・牛、鳥、花)、妻虹梁(唐草)、木鼻(拳鼻漢文)		



写143-8 全景



写143-9 妻飾り



写143-10 棟

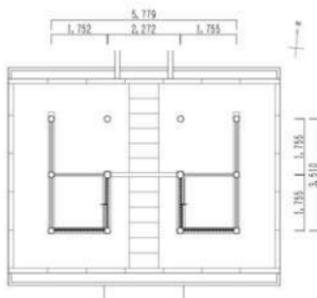


図143-3 平面図(二天門)

刻で極彩色を施す。正面の持国天・増長天象を安置する場合は、近年改修しガラスを嵌込む。

手水舎(図143-4、表143-4、写143-11~143-13)

建造年代は棟札より文化元年(1804)2月13日(棟札には「享和四年」とあるが文化への改元は2月11日のため文化元年と記す)。棟梁は橋本平藏宗久五兵衛 他5名。正面1間、側面1間、切妻造、平

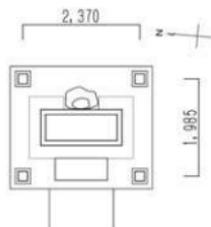


図143-4 平面図(手水舎)

入、瓦葺。台輪の上より朱色、一部を黒と白で彩色する。

笈形は藁のような抽象的な彫刻で、虹梁、幕股、木鼻は刻線彫である。

中央に手水鉢、手水鉢後ろより龍口より吐水。手水鉢に嘉永4年(1851)と刻まれており、手水鉢を4体の獅子を支える。

表143-4 手水舎

建造年代/根拠	文化元年(1804)/棟札	構造・形式	正面(2.37m)、側面(1.98m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	[大工]棟梁 橋本平藏宗久五兵衛(當所)、橋本半右衛門直清、高橋庄五郎 知義(當所)、加藤勘右衛門 利忠(糟川村)、木村平治郎 茂清(小角田村)、橋本重五郎 興純(當所)、[木挽]谷田傳兵衛 俊英(當所)	基 礎	コンクリート、切石
軸 部	角柱	組 物	出三斗組
中 備	幕股	軒	二軒繁垂木
妻 飾	懸魚、虹梁大瓶束、笈形	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・籠障子	なし	床	なし
天 井	棹縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	上部朱塗を基調に白と黒で彩色	飾 金 物 等	柱巻
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身舎]懸魚、笈形、妻虹梁(波)、木鼻(板渦文)、幕股		



写143-11 正面



写143-12 側面



写143-13 妻飾

大師堂 (図143-5、表143-5、写143-14~143-19)

建造年代は18世紀と建築様式より推定する(当初の1階部)。工匠は不明。方行造、瓦調金属板葺で、1階は、正面3間・側面3間、2階は正面1間・側面1間。明治初年に移築したと伝わる。2階への階段が無いことと、1階屋根裏の状況より当初は平屋であったが、明治初年の移築時に2階を増築したと推測される。1階の屋根はせがいで造ら、当初茅葺きであったと思われる。

1階の柱4本中央に須弥壇が置かれ、厨子がのり中に木像を安置する。各格天井には色鮮やかな花鳥、神獣等の絵が描かれ、中央に龍が描かれた大きな墨絵があり、1階中央の柱4本は2階へと延びる。2階へは階段がないため、1階天井板を外し、脚立をかけ屋根裏に登る、さらに小屋裏内の階段を数段をへて2階へ入る。1階屋根がせがいで造り、2階に縁を設けている為、1階屋根裏の高さがある。

2階外部内部共に朱色で彩色されており、天井は色鮮やかな種子(梵字)が描かれている。窓形状は、内部は火灯窓であるが、外部からは四角い板戸となっている。内部に木像を2体安置する。内部の建築様式は1階と2階では時代が異なる。

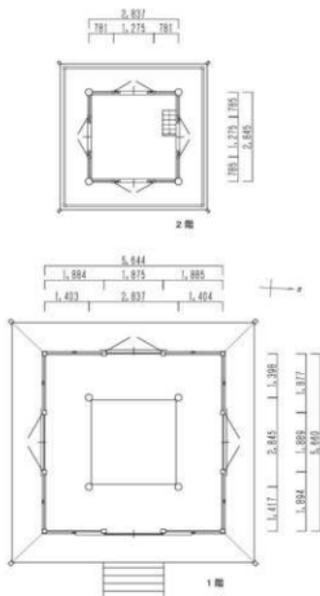


図143-5 平面図(大師堂)

表143-5 大師堂

建造年代/根拠	18世紀/建築様式(改造前の当初部)	構造・形式	[1階]正面(5.64m)、側面(5.66m) [2階]正面(2.83m)、側面(2.84m)、方行造、瓦調金属板葺
工匠	不明	基礎	基礎(コンクリート)、基石
軸部	[1階]角柱、丸柱(中央) [2階]丸柱	組物	[1階]舟肘木(絵様) [2階]大斗絵様肘木
中備	[2階]大斗肘木(絵様)	軒	[1階]一軒半繁垂木、せがいで造 [2階]一軒半繁垂木
妻飾	なし	柱間装置	塗壁、アルミ引分戸、板両開戸
縁・高欄・懸障子	[1階]四方縁 [2階]四方縁、擬宝珠高欄	床	[1階・2階]拭板張
天井	[1階・2階]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗装	[外部・2階内部]木部朱塗	飾金物等	なし
絵画	[1階]天井画(花・木・鳥・獣、神獣、龍) [2階]天井画(梵字)	材質	不明
彫刻	木彫(拳鼻)、肘木(唐草絵様)		



写143-14 全景



写143-15 1階内部



写143-16 1階天井絵(龍)



写143-17 1階小舎裏



写143-18 2階内部



写143-19 2階天井

まとめ

明王院は数多くの建物等を有する。

不動堂の軒の二軒繁扇垂木は群馬県内でも珍しい。内部の欄間彫刻6枚(孔雀、鳳凰、天女、迦陵頻伽)は極彩色で、迦陵頻伽は美しい声で歌うと言われている仏教説話の想像上の生物で、建造年代頃に多く用いられた。柱上部の金襴巻は幕により外陣からは見えない、剥落している箇所もあるが新田氏の家紋(大中黒・新田一つ引)が中央に金色で描かれる。柱の間の詰組も特徴的である。また、縁の擬宝珠全てに嘉永3年(1850)と刻印がある。

二天門の組物は、正面と側面は出三斗、背面は平三斗に虹梁鼻が出ている。彫刻は、藁股内に厚みのある鳥や花など透彫がある。市重要文化財の持国

天・増長天象も近年修復され安置される。

手水舎の彫刻は抽象的で時代を表す。棟札が残るのは珍しい。

大師堂は、外部1階は舟肘木に唐草絵様の刻線彫。2階は、大斗絵様肘木が見られるが、内部に組物や彫刻はない簡素な造りである。

(伊藤美保子)

【参考文献】

『尾島町近世寺社建築調査報告書』尾島町教育委員会 平成10年

『尾島町誌 通史編 上巻』尾島町 平成5年

『上野国寺院明細帳6 新田郡』群馬県文化事業振興会 平成9年

148 茂林寺（もりんじ）

表148-1

寺院名	青龍山茂林寺	所在地	館林市堀工町1570
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 茂林寺
主本尊	釈迦牟尼仏	仏事	守鶴尊大祭(1/28)、大般若祈祷会(旧暦6/16)、孟蘭盆大施食会(8/13)
創立・沿革	応永33年(1426)美濃国の大林正通が開山し、応仁2年(1468)に青柳城主赤井正光(照光)が開基という。大永2年(1522)に後柏原天皇の勅願寺となった。館林城主榊原康政及び榊原忠次から禁制が発給されている。また将軍家光・家綱から青柳村のうち23石4斗の朱印状が発給されている。		
文化財指定	茂林寺のラカンマキ(県天記 平成7年3月)、茂林寺沼及び低地湿原(県天記 昭和35年3月)		

位置・配置(図148-1、写148-1)

茂林寺は館林市南方、茂林寺駅東に位置する曹洞宗寺院である。境内北東に群馬県指定天然記念物の茂林寺沼及び低地湿原が広がる。南の東西方向に走る道路から北に延びる細い路地を進むと、西に境内が広がる。境内東、やや南寄りに総門が東面して建つ。直線軸に総門、山門、本堂、開山堂を並べており、禅宗寺院伽藍の特色をよく表している。総門から西に向かって山道が延び、樓門形式の山門をくぐると、正面に東面した本堂が見える。本堂手前の南側に守鶴堂が北を向いて建つ。北側に客殿が本堂と繋がり、さらに北へ庫裡が繋がっている。本堂の西に開山堂、茶室、蔵が建ち並ぶ。

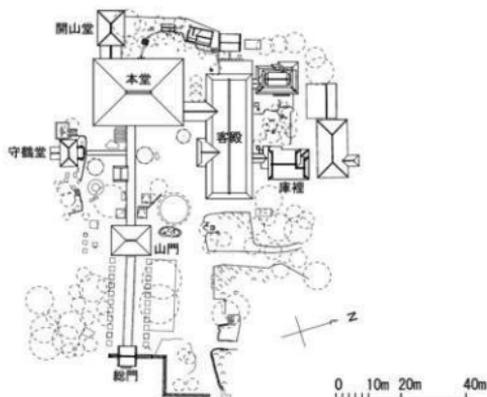


図148-1 配置図

由来および沿革

応永33年(1426)美濃国の大林正通が開山し、応仁2年(1468)に青柳城主赤井正光(照光)が開基という。大永2年(1522)に後柏原天皇の勅願寺となった。天正18年(1590)に館林城主榊原康政から、寛永12年(1635)には榊原忠次から寺中での乱暴狼藉を禁止した禁制が発給されている。また将軍家光・家綱から青柳村のうち23石4斗の朱印状が発給されている。

大林正通禪師は美濃龍泰寺開山の華叟正夢禪師に師事し、のち修業のため諸国を行脚して上野国伊香保の麓で守鶴和尚と出会い以降同行することになる。大林とともにこの地に来た守鶴が、汲んでも湯が尽きない茶釜をもたらしたという伝説がある。守鶴は猪が化けたもので、江戸時代には「分福茶釜」で広く知られ、明治時代には作家の巖谷小波が「日本昔噺 文福茶釜」として発表して全国に広まった。



写148-1 境内全景

本堂

本堂 (図148-2、表148-2、写148-2~148-7)

桁行13間 (22.67m)、梁間9間 (16.23m)、平屋建て寄棟造りで屋根を茅葺きとする。柱上部に丸桁をのせ、正面外部のみ化粧の舟肘木を取付けている。曹洞宗寺院によく見られる方丈形式の平面である。正面通り1間を土間として、中央部に木階を三級設ける。天井は化粧屋根裏である。階上正面と南面は板敷の広縁を廻らし、正面の広縁に面して桁行に4室、梁行きに2列で並べる。正面側は左から西脇間、大間、東脇間の畳敷き三室を並べ、奥側は西室中、内陣、東室中を並べる。西室中は正面側半分を畳敷、残りを拭板敷としている。板張りの内陣は中央に須弥壇を配し、内陣北側の東室中は、宝物室



図148-2 平面図(本堂)

表148-2 本堂

建造年代/根拠	18世紀前期/寺院記録・建築様式	構造・形式	正面22.67m、側面16.23m、寄棟造、平入、茅葺
工 匠	不明	基 礎	自然石
軸 部	[身舎]角柱、土台	組 物	[身舎]舟肘木(正面側柱上外側のみ)、二手先拳付(内陣来迎柱上)
中 備	二手先拳付(内陣来迎柱上)	軒	二軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	正面：折戸、正面脇間：内ガラス障子付の火灯窓
縁・高欄・脇障子	背面、側面：切目縁	床	畳敷、板張(廊下、内陣)
天 井	竿縁天井、格天井(内陣、大間)、彫刻板支輪(内陣来迎柱上)	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(唐縁)
塗 装	素木、極彩色(彫刻板支輪)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	内陣大間境欄間彫刻(龍、鳳凰)		



写148-2 全景



写148-3 側面



写148-4 内陣



写148-5 須弥壇上部組物



写148-6 来迎柱木鼻



写148-7 彫刻欄間

の続きとして使用している。天井は大間と内陣を格天井、他は棟縁天井とする。本堂北側の二室は間に仕切りがなく、梁行き全体にわたる大型の宝物室で、棟縁天井を通す。小屋の架け方から築造当初から仕切りがなかったと考えられる。

建造年代は寺伝に元禄頃とあり、また享保13年(1728)6月12日新始、享保15年(1730)2月26日完成と23世記峯禪克の記録が残る。小屋組に旧部材を再使用しており、享保に改築されたと考えられる。来迎柱が180度反転し、柱頭に構造上の繋がりが無

く、また、柱上部の組物や支輪板の彫刻が本堂全体と比べ発達している事などから、後年内陣の一部が改造されたとみられる。

山門 (図148-3、表148-3、写148-8~148-10)

正面7.34m、側面4.36m八脚門の2階建て楼門形式で寄棟造り、屋根を茅葺きとする。

初重は中央間を参詣道として開放になる。両脇間は仁王を安置するように区画される。上層は木口縁を廻らし、正面中央間に両引き戸を設ける。当初は

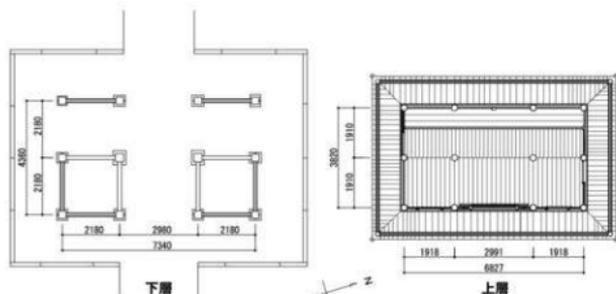


図148-3 平面図(山門)

表148-3 山門

建造年代/根拠	17世紀後期/寺院記録・建築様式	構造・形式	3間1戸楼門(正面7.34m)、側面2間(4.36m)、寄棟造、平入、茅葺
工 匠	不明	基 礎	礎石(切石)
軸 部	[下層]角柱、地覆、内法貫、頭貫、台輪 [上層]丸柱、切目長押、頭貫、台輪	組 物	[下層]二手先変形 [上層]出三斗拳鼻付
中 備	[下層]正面：二手先変形、脇：間斗東 [上層]間斗東(裏東)	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[上層]両引戸(唐戸)、引戸、火灯笼(格子付)
縁・高欄・籃障子	[上層]四方縁。擬宝珠高欄	床	[下層]土間コンクリート [上層]板張
天 井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	[上層]須弥壇
塗 装	総塗塗	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	木鼻(絵様)		



写148-8 正面



写148-9 側面



写148-10 木鼻

軸穴痕跡により両観音開きである。上層の天井は現在存在していないが、竿縁天井の痕跡が残っている。本堂に安置されている十六羅漢を昭和中期頃まで上層に安置しており、須弥壇が中央後方に残されている。23世卍峯禪克の記録で元禄7年(1694)建造と伝えられ、経年によると思われる風蝕や木鼻に施された浅い刻線彫の絵様からも寺伝の元禄頃の建造と推定する。

まとめ

茂林寺伽藍は直線軸に総門、山門、本堂、開山堂を並べており禪宗寺院の特色をよく表している。

本堂は曹洞宗寺院本堂特有の平面構成による奥の間、上間を持つが、二室間に仕切りがなく梁行き全体にわたる大広間となっており、矩手に奥の間が接する特異な平面構成である。大規模な茅葺きの外観は見応えがあり、大広間を一体化した構成は類例が

少なく館林城主と本寺との関係を示すものかもしれない。

山門は禪宗様の木鼻の渦巻き文と加工形状など江戸中期の特色をみせている。二重軒、隅木は当初の状態を遺しており、寄棟茅葺きの外観と合わせて元禄期の遺構として貴重である。

江戸時代から「分福茶釜」の寺院として広く知られ、多くの参拝者の訪れる寺院である。由来になったタヌキ（元は貉）の置物が多数配され和やかな雰囲気の中、県指定天然記念物のラカンマキからも歴史を感じる寺院である。

(小島恵理子)

【参考文献】

『館林市史 特別編第7巻』館林市史編さん委員会 令和3年
『館林の寺社と史料』館林市史編さん委員会 令和2年

149 普濟寺〔ふさいじ〕

表149-1

寺院名	龍洞山普濟寺	所在地	館林市羽附町1691
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 普濟寺
主本尊	薬師如来	仏事	彼岸(3/21・9/23)、花まつり(4/7頃)、お施餓鬼(8/16)、座禅会(毎週第4土曜)、写経・写仏(毎月第2・第4火曜)、御詠歌(毎月第2・第4木曜)
創立・沿革	大永3年(1523)、のちに館林城主となる足利の長尾政長(景長)の開基といわれ、大雲伊俊禪師が開山したとされる。大永5年(1525)に現在地に移転たと伝える。五世花翁は上杉謙信の弟で、徳川家康と幼少期に交流があったという。天正19年(1591)に「佐貫庄大窪内五ヶ(箇)村」(現板倉町)の100石を寄付する徳川家康朱印状が発給され、2代秀忠・3代家光・4代家綱のときにも発給されていた。		
文化財指定	銅鐘(市重文 昭和50年3月)		

位置・配置(図149-1、写149-1)

館林の南東部、城沼南岸の台地上に位置する曹洞宗寺院である。境内地の南方50mに国道354号線が東西に走る。境内南を東西に走る道路に接続する山道入口に総門が南面して建つ。100m程北に進み、元の東から延びる山道と交差したところに山門が東

に面して建っている。山門を潜り西に進むと北側に鐘樓堂が建ち、正面に東面した本堂が見える。境内北に庫裡が南面して建つ。

由来および沿革

大永3年(1523)、のちに館林城主となる足利の長尾政長(景長)の開基といわれ、大雲伊俊禪師が開山したとされる。禪師は上州を訪れた際、政長の懇願によって羽附郷内の「町屋」に一寺を開いたという。大永5年(1525)に城沼東岸の「篠崎」に寺を移転し、さらに天正18年(1590)の北条氏滅亡後に現在地に移転したと伝える。〔普濟寺由来之事〕。五世花翁は上杉謙信の弟で、徳川家康と幼少期に交流があったという。天正19年(1591)に「佐貫庄大窪内五ヶ(箇)村」(現板倉町)の100石を寄付する徳川家康朱印状が発給され、2代秀忠・3代家光・4代家綱のときにも発給されていた。元禄8年には幕府の命により大本山永平寺より曹洞宗における寺格の第一等である常恒会地の免牒を受ける。享保8年(1723)に旧本堂が再建されたことが棟札からわかっている。寛政2年(1790)「普濟寺絵図面」には当時の境内の様子が残されており、本堂・庫裏・衆寮・三門(山門)を廻廊で繋ぐ曹洞宗寺院に見られる典型的な伽藍配置が確認できる。昭和26年(1951)に旧本堂を茅葺から瓦葺きに葺替え。昭和62年(1987)に梵鐘の鋳造・鐘樓の再建。平成13年(2001)に本堂の再建が行われ現在に至る。

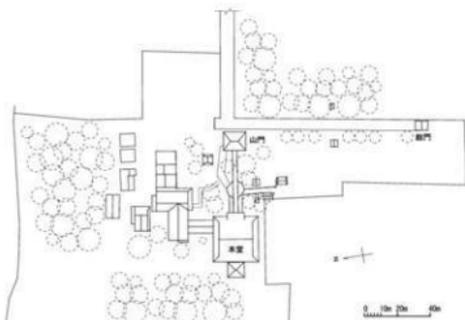


図149-1 配置図



写149-1 境内全景

山門(図149-2、表149-2、写149-2～149-7)

3間1戸の八脚門(棟門)である。屋根は茅葺の寄棟造りで、軒は一軒疎垂木である。柱は全て円柱

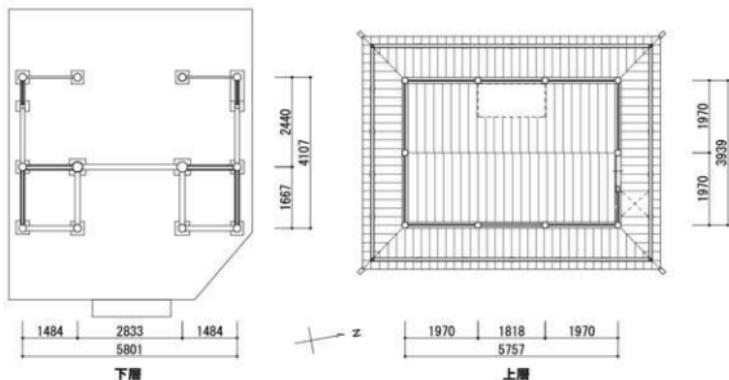


図149-2 平面図(山門)

表149-2 山門

建造年代/根拠	江戸中期/建築様式・須弥壇墨書	構造・形式	3間1戸楼門(正面5.80m)、側面2間(4.12m)、寄棟造。平入、茅葺
工 匠	不明	基 礎	礎石(切石)
軸 部	丸柱(控柱共) [下層]地置、内法貫、頭貫(中央間・虹梁) [上層]切目、内法長押、丸桁	組 物	[下層]出三斗 [上層]なし
中 備	[下層]組物(出三斗)、幕股 [上層]なし	軒	一軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[下層]なし [上層]火灯窓(格子付)
縁・高欄・脇障子	[下層]なし [上層]四方縁、擬宝珠高欄	床	[下層]切石四半敷 [上層]板張
天 井	[上層]化粧屋根裏天井	須弥壇・厨子・宮殿	[上層]須弥壇、宮殿(釈迦如来像)
塗 装	なし	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	木鼻、虹梁、幕股(絵様)		



写149-2 全景



写149-3 側面



写149-4 初重虹梁



写149-5 初重木鼻



写149-6 初重幕股



写149-7 初重幕股

で、礎石に立てる。下層の裏側両脇間は地覆を設けず腰貫で固める。本柱筋中央間は虹梁型頭貫を通し、中央に板葺股を載せ敷梁を受ける。両控え柱筋中央間は虹梁を架け根肘木で支持する。上層は桁行3間、梁間2間で四隅の柱は通し柱とせず、それぞれ四天王銘の墨書が書かれている。下層は本柱筋が表側に寄るような非対称な平面になっている。南西の間に市指定重要文化財の梵鐘が据え置かれている。門扉は設けられておらず、薬座や肘壺金具の痕跡も見られない。上層は擬宝珠付高欄を設けた切目縁を廻し内部は一間である。須弥壇を設け素木の宮殿を載せ、釈迦如来像を安置する。正面の両開きの棧唐戸は切断され、横向きにして柵のように嵌められているため正面は常に開放しとなっている。正面両脇間には格子付の火灯笼を設ける。天井は化粧屋根裏天井とし、小屋梁が室内から露わとなっている。

まとめ

寛政2年(1790)「普濟寺境内絵図面」に「但シ山門ハ大永五年建立也」とあり、移転前の当初の山門

を移築していることが書かれている。明治28年(1895)の古寺調には、「大永年中當寺開山ノ建立」と記されているが、棟札等有証な史料は見つかっていない。正面両脇間には仁王像は安置されておらず、金剛柵や門扉が設けられていた痕跡も見当たらないため、建立後に大きな改変はなく再建当時の姿を保っていると思われる。軸部に古材を用いている可能性はあるが、古寺調には総門の建立が延宝6年(1678)とも記されており、古風な形式をとどめているものの、同時期に改築されたとも考えられる。浅い彫の絵様や猪目に繰り抜かれた木鼻、虹梁は実肘木を介さず、根肘木で直接受け、袖切形状は旧本堂と異なる。加工された年代は旧本堂が再建された享保8年(1723)より遡ると考えられるため、江戸中期には建てられていたと推察する。

(小島恵理子)

【参考文献】

『館林の神社と史料』館林市史編さん委員会 令和2年
『館林市史 特別編第7巻』館林市史編さん委員会 令和3年

152 常楽寺〔じょうらくじ〕

表152-1

寺院名	光明山無量寿坊自在院常楽寺	所在地	館林市木戸町甲580
宗派	真言宗豊山派	所有者・管理者	宗教法人 常楽寺
主本尊	未勸明主	仏事	修正会(1/1~4)、涅槃会(常楽会(2/15))、足利大師会の大師参り(4/21)、施餓鬼会(8月第一土日)、榮燈護摩火渡り修行(11/3)、除夜の鐘(12/31)、不動護摩(毎月28日)
創立・沿革	弘安3年(1280)7月1日、宥尊上人の開基。鶏足寺(足利市小俣町)意教流慈猛方末寺で足利四ヶ榎林の一寺。第十六世鎌朝(万治3年(1660)寂)中興開山、第十八世快脚(元禄3年(1690)寂)が法流中興開山。近隣16ヶ寺の本寺になっており、僧侶の学問所である談林(檀林)でもあった。関東八十八か所霊場の一つ。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図152-1、写152-1)

館林市北西部で多々良川と矢場川の合流地点の台地上にある真言宗寺院である。常楽寺のある木戸町は江戸時代以前は木戸村と呼ばれ、鎌倉時代から下野国梁田郡足利荘の木戸村として存在していた。江戸時代の寛文4年(1664)に矢場川の付け替えによって、上野国邑楽郡に編入された。

境内南に赤城神社があり、木戸城跡と推定される。境内東側を赤城神社から続く道が南北にはしる。境内南東部から西に山道が延び入口に山門が東に面して建っている。山門を潜ると北に鐘樓堂が建ち、正面に東面した阿弥陀堂が見える。境内中央北寄りに本堂が南面して建ち、本堂の北東に庫裡が繋がる。

由来および沿革

弘安3年(1280)7月1日、宥尊上人の開基。鶏足寺(足利市小俣町)意教流慈猛方末寺で足利四ヶ榎林の一寺。宥尊上人以来今日まで血脈相承し、第二十二世慧海(享保14年(1729)寂)が阿弥陀堂建立、第二十五世慧寿(宝暦4年(1754)寂)が本堂を建立した。近隣16ヶ寺の本寺になっており、僧侶の学問所である談林(檀林)でもあった。関東八十八か所霊場の一つである。

板碑、木像、地藏、画像などが多く伝わっている。第十四世重朝に「此の師の銘に於て華鬘ほぼ完全に具足して現に存す」とある。この華鬘は現在12枚あり、寛永12年(1635)の年号銘がある。

本堂(図152-2、表152-2、写152-2~152-7)

正面21.19m、側面14.76mで寄棟造。屋根を銅板で葺く。身舎の柱は全て角柱で、米迎柱のみ丸柱である。架構は立上せ柱の形式をとり、側柱は舟肘木を乗せ丸桁を受けている。軒は四方とも二軒となっている。正面1間と両脇1間ずつを広縁とし、内部

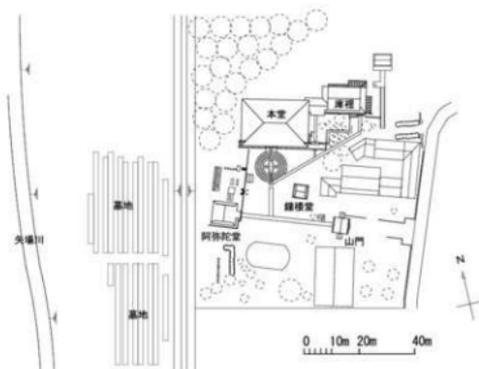


図152-1 配置図



写152-1 境内全景

1. 本調査：寺院建築

は桁行に三室、梁行に二室を設けた計六室で方丈形本堂である。広縁は全て板敷で、棹縁天井を吊る。東側広縁北寄りに二間に、物置として二階を設けられている。正面南側の室を外陣とし、板敷で東西南外周に畳を敷き廻す。四方には天女や霊獣などの欄間彫刻を嵌める。中央北側の室は内陣とし板敷、中央北寄りに須弥壇が設けられている。西側南寄りの室を西脇間、北寄りを西奥の間とし、共に十二畳の畳敷きで、奥の間の北側西寄りには床が設けられている。東側南寄りの室を東脇間、北寄りを東奥の間とし、共に十八畳の畳敷きで、東奥の間の西面北寄りに付床が設けられている。六室全てに棹縁天井を吊る。

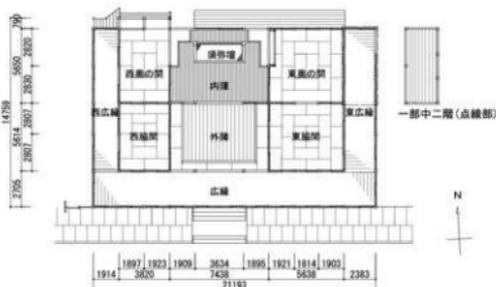


図152-2 平面図(本堂)

表152-2 本堂

建造年代／根拠	寛延4年(1751)／祈禱札	構造・形式	正面21.19m、側面14.76m、寄棟造、平入、銅板葺
工 匠	[彫工]板橋伊平次(墨書)	基 礎	自然石石端建
軸 部	[身舎]角柱、土台(外周のみ)、腰・内法長押	組 物	[身舎]柱上実肘木(外側のみ) 一手先拵付(来迎柱上)
中 備		軒	二軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	引違いガラス障子
縁・高欄・脇障子	なし	床	[広縁・外陣・内陣]板張り、畳敷
天 井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(唐縁)、本尊厨子
塗 装	竿縁天井	飾 金 物 等	垂木、隅木先
絵 画	[軸部]朱・一部黒 [彫刻]極彩色	材 質	檜
彫 刻	なし		



写152-2 全景



写152-3 内陣



写152-4 欄間彫刻



写152-5 欄間彫刻



写152-6 外陣垂鴨居



写152-7 来迎柱組物

「過去帳」に、第二十五世慧寿（宝暦4年(1754)寂）が「本堂建立之主」とある。延享4年(1747)の祈祷札が残り、本堂須弥壇に寛延4年(宝暦元年・1751)の墨書きがあることから、本堂は寛延4年(1751)に慧寿が建立したとわかる。大正14年(1925)に屋根を茅葺きから銅板に葺替した。

阿弥陀堂(図152-3、表152-3、写152-8～152-10)

方三間（正面5.92m、側面6.55m）の阿弥陀堂建築で一間の向拝を付す。入母屋造りで茅を葺く。総朱塗りで、身舎の柱は全て丸柱で上部に棕を付け、向拝柱は角柱で几帳面取りである。四周に切目縁を設け、正面及び北側面の中央に一間幅の木階三級が設けられている。内部は一室で、西寄りに須弥壇が設けられ、来迎柱までを畳敷きとする。来迎柱後ろ南北半間に脇棚を設け、後陣は板敷となっている。組物は和様の出組を詰組として丸桁を受け、内部は出三斗で天井桁を受ける。来迎柱筋の中備は本葎敷である。天井は折上げの格天井を吊り、ほぼ中央は鏡天井で龍が描かれている。「八方観みの龍」と呼

ばれ、「永旭主道図」とある。享保2年建造 大工：北大島長兵衛と棟札から判明している。大正14年(1925)に屋根を葺き替え。平成31年～令和2年(2019～2020)屋根の葺き替えと部分修理を行った。

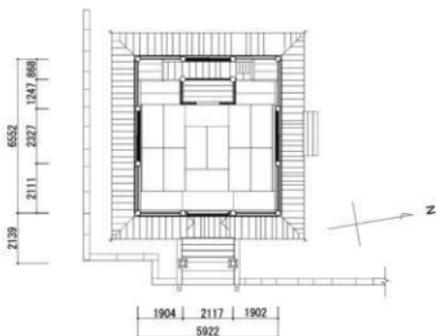


図152-3 平面図(阿弥陀堂)

表152-3 阿弥陀堂

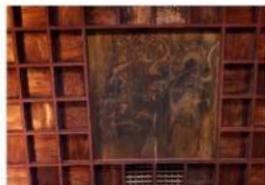
建造年代/根拠	享保2年(1717)/棟札	構造・形式	正面3間(5.92m)、側面3間(6.55m)、入母屋造、平入、向拝1間、茅葺
工 匠	[大工]北大島長兵衛(棟札) [天井絵師]永旭主道(墨書)	基 礎	自然石端建
軸 部	[身舎]丸柱、地・内法長押、台輪 [向拝]角柱、木鼻	組 物	[身舎]一手先拳付 [向拝]出三斗変形
中 備	[身舎]斗組一手先拳付 [向拝]藁股	軒	二軒繁垂木、軒支輪 [向拝]打越輪垂木
妻 飾	虹梁太瓶束	柱 間 装 置	[正面]折戸 [脇間]蒔戸 [側面]蒔戸・引違戸(舞良戸)
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床	畳敷 [来迎柱後陣]板敷
天 井	格天井(中央鏡板)	須弥壇・厨子・宮藏	須弥壇、厨子
塗 装	総朱塗	飾 金 物 等	長押角
絵 画	天井鏡板(八方観みの龍)	材 質	つが [来迎柱]檜
彫 刻	木鼻(獅子、猿)、手扶(牡丹)、虹梁(絵様)		



写152-8 正面



写152-9 堂内



写152-10 鏡天井

鐘楼 (図152-4、表152-4、写152-11～152-13)

桁行1間(正面5.38m)、梁間1間(側面5.12m)構造で袴を付けず四方吹き放ち、二層目に鐘を吊る。入母屋屋根とし椀瓦を葺く。柱はすべて丸柱で内転をする。軸部は地覆、胴指貫、頭貫で固め台輪を廻す。初層は小底を設け、二層目は腰高の擬宝珠高欄付きの切目縁を廻らす。屋根は二軒半繁垂木で、飛檐垂木下端のみ反りを付ける。庇は板軒で出桁で支え、和様の出組(蛇腹支輪付)で丸桁を受ける。軸部は朱塗りで、垂木、蛇腹支輪を黒く塗り、裏板、支輪板は白く塗る。小屋裏に茅が残っており、後年、瓦に葺き替えられたと思われる。

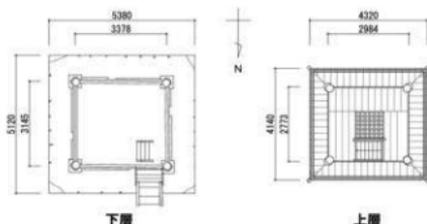


図152-4 平面図(鐘楼)

『多々良村誌』に梵鐘銘の写しが残されており、享保18年(1733)野州佐野住人小島作左衛門の鋳造、大工は太田又兵衛とある。様式も年代に相応しく同年の建造と考えられる。

山門 (図152-5、表152-5、写152-14～152-16)

1間1戸(正面3.12m、側面3.41m)の四脚門で切妻屋根とし椀瓦を葺く。両脇に袖壁を付す。柱は

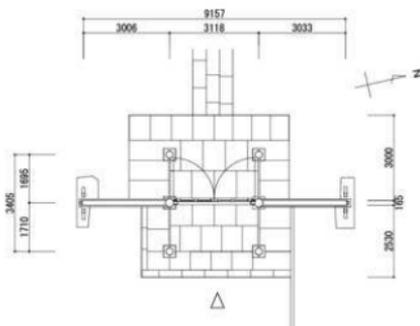


図152-5 平面図(山門)

表152-4 鐘楼

建造年代/根拠	18世紀前期/建築様式	構造・形式	桁行1間(正面5.38m)、梁間1間(側面5.12m)、構造、入母屋造、椀瓦葺
工 匠	[大工]太田又兵衛 [梵鐘鋳造]野州佐野住人小島作左衛門	基 礎	礎石(切石)石地建
軸 部	丸柱 [下層]地覆、胴指貫 [上層]内法貫、頭貫、台輪	組 物	[上層]一手先拳付
中 備	斗組一手先拳付	軒	二軒半繁垂木、軒支輪
妻 飾	大瓶束、笈型、懸魚	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・脇障子	[上層]四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[下層]土間 [上層]板張
天 井	[上層]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	[軸部]朱塗り [垂木・蛇腹支輪]黒 [裏板・支輪板]白	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	木鼻(絵様)		



写152-11 全景



写152-12 釣鐘吊金物



写152-13 上層拳鼻

表152-5 山門

建造年代／根拠	19世紀後期／建築様式	構造・形式	1間1戸四脚門(3.12m)、側面2間(3.41m)、切妻造、平入、棧瓦葺
工 匠	不明	基 礎	礎石(切石)石端建
軸 部	親柱、控柱、冠木	組 物	出三斗変形
中 備	嘉股	軒	一軒葺垂木
妻 飾	大瓶束、笏型	柱 間 装 置	両開き大戸
縁・高欄・籃障子	なし	床	敷石
天 井	なし	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	木鼻、嘉股(絵様)		



写152-14 正面



写152-15 妻飾



写152-16 木鼻

全て丸柱で、棟木は大瓶束で支える。両開きの大戸を有す。冠木上の中備と棟持ち束の笏形を雲と波状に細工している。明治35年(1902)の『上野国名跡図誌』に表門が同じ位置に描かれている。風食が小さいため19世紀後期の建造と推察する。

まとめ

本堂は方丈形式の六間取りで、間取り、軸部に大きな改造はなく、建設当初の形を現在に伝えている。架構面は立上せ柱を使用し近世の工法を取り入れている。欄間彫刻と須弥壇を彫った彫師「板橋伊平次」は、日光東照宮等のある日光山の建造物を手掛けた幕府彫物大工棟梁「初代高松又八邦教」の門弟で、大変貴重な作品が残されている。

阿弥陀堂の打越垂木は輪垂木で、組物の肘木には笹縁りが施されており、屋根裏で隠れてしまう斗も外部と同様に仕上げられ丁寧な作事がされている。軸部や間取りに大きな変更は無く、当時の建築手法を伝える貴重な建物である。令和2年(2020)11月に落慶法要を行い当時の姿を後世に伝えている。

本堂、阿弥陀堂、鐘楼は共に18世紀に建造された事が明確で、大きな改変もなく、この地方の建築様式を伝える重要な寺院である。

(小島恵理子)

【参考文献】

『館林の寺社と史料』館林市史編さん委員会 令和2年
『館林市史 特別編第7巻』館林市史編さん委員会 令和3年

161 穴原薬師堂〔あなはらやくしどう〕

表161-1

寺院名	穴原薬師堂	所在地	みどり市大間々町塩原633
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	穴原薬師堂保存会
主本尊	薬師如来	仏事	毎年1月の第二日曜日に大祭(厄除け、家内安全祈願等)
創立・沿革	明治期の古書によると平安時代の初期、大同年間に弘法大師の彫刻した薬師如来像があったという。又、堂下に大師の井戸があり、枯れることはなかったとの書き伝えがある(市案内書)。薬師様は眼病に良く効いたとの伝承もある。		
文化財指定	穴原の薬師堂(市重文 昭和60年3月)		

位置・配置(図161-1、写161-1)

大間々町の塩原地区の中央に県道257号線(根利八木原大間々線)が通っている。途中に左下に分かれる道があり「わたらせ渓谷鉄道神梅駅」方面に向かう。坂を下りきった辺りの右側田んぼの中に参道と山門が見える。山門は本堂と不釣り合いと思われ様々な大きさで、入母屋造草葺鉄板被の二層建て、本堂は山門を抜けた正面の階段上の高台に方形造草葺鉄板被の平屋建の本堂、東側には昭和40年代頃の付属棟が増築してある。

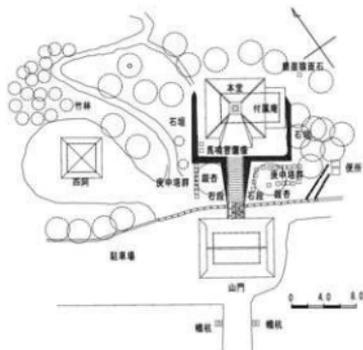


図161-1 配置図



写161-1 境内全景

由来および沿革

薬師堂の開基は定かではないが、明治期の古書によると、大同年間(806~809)に弘法大師の御作の如来像や堂下に大師の御手洗井戸があり、湧き出る水の枯れることが無いとの書き伝えがある(市、案内書)。

堂内には本尊である薬師如来を中心に左右に日光・月光菩薩、後ろに十二神将が配置され、特に眼病に良く効くと信仰を集めて居る。

境内には糞蚕の神様と信仰された「馬鳴菩薩像」や裏手の崖には猿面が縁彫りされた「磨崖猿面石」、上には青面金剛の石塔があり、地元の信仰に根付いている。

本堂(図161-2、表161-2、写161-2~161-7)

本堂は間口3間(3.84m)、奥行2間(3.84m)の正方形の方形造で屋根上には宝珠と露盤を一つの石から彫り出した珍しい棟飾りを乗せている。正面には向拝があり、彫刻の臺股や木鼻で飾られている

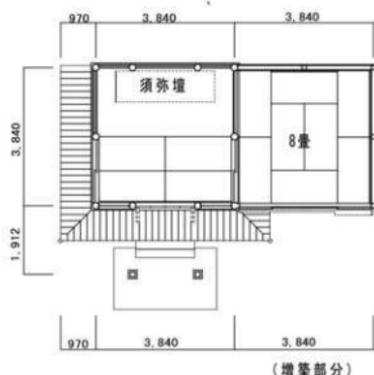


図161-2 平面図(本堂)

表161-2 本堂

建造年代/根拠	享保15年(1730)/棟札	構造・形式	正面(3.84m)、側面(3.84m)、方形造、草葺(鉄板被)
工 匠	[大工]上山山田郡穴原 棟梁 金平、野州 佐野 七右衛門	基 礎	自然石(玉石)
軸 部	[身舎]丸柱(粽)、腰貫、頭貫、長押、角柱、虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎]出組、連三斗組
中 備	葺 膠	軒	二軒疎垂木、蛇腹支輪
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]唐棧戸 [側面・背面]板壁
縁・高欄・脇障子	[大床]二方切目板	床	[外陣]畳敷 [内陣]板張
天 井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(唐様)
塗 装	素木、朱塗(木鼻、組物、虹梁)、櫃彩色(手挟)	飾 金 物 等	なし
絵 画	天井画(格間 花鳥図)	材 質	不明
彫 刻	[向押]柱(几帳面)、葺 膠(虎)、手挟(牡丹)、海老虹梁(絵様)、木鼻(猿・獅子) [身舎]正面額(松、鷹)		



写161-2 本堂正面



写161-3 向押葺 膠の虎



写161-4 向押の彫刻



写161-5 木鼻の彫刻



写161-6 石の棟飾



写161-7 須弥壇

る。草葺屋根に鉄板が被せてあり、保存状態は比較的良い。内部は正面に唐様の厨子があり、天井は格天井で花鳥の絵画で埋め尽くされている。また、本堂の右には現代の8畳の間が増築され集会的に利用されている。

本堂に残された享保15年(1730)の棟札によると、地元穴原の「棟梁大工 金平」らの手で建てられたと記されていた。彫工の名は記されていないが、建造年ころに、黒保根の医光寺薬師堂や熊谷長慶寺の薬師堂にも葺 膠の虎の彫刻が見られる事や、木鼻、絵様の建造様式からも、棟札通りであると推定した。

又、堂内の須弥壇には丙午年の墨書が残されていた、丙午年は棟札近辺の時代では享保11年(1726)に

なり本堂再建の前になる。

山門 (図161-3、表161-3、写161-8~161-10)

山門は3間1戸の八脚楼門、通称仁王門とも呼ばれるもので、入口は一對の仁王様で守られている。昭和60年(1985)、この仁王様を解体修理した際、頭部から文書が出てきて、寛政4年(1792)に地元の「仏師田村利八」が彫ったものであることが判明した。利八は寛政元年(1789)桐生天満宮の棟札に箔方として名を残している。

建造年代は、虹梁に残された浮彫絵様や拳鼻の文様も18世紀後期の様式であり、文書の通り寛政4年(1792)とした。

表161-3 山門

建造年代/根拠	寛政4年(1792)/古文書	構造・形式	3間(5.96m)1戸楼門、側面2間(3.53m)、入母屋造、平入、草葺屋根(鉄板葺)
工 匠	不明	基 礎	礎盤(花崗岩)
軸 部	丸柱(粽)、角柱、貫、副貫、頭貫	組 物	出三斗
中 備	幕股(四方、植物)	軒	二軒繁垂木、軒支輪(彫刻)
妻 飾	懸魚(鱗・六葉)	柱 間 装 置	火灯笼、引分戸、板壁
縁・高欄・藍障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[下層]石張 [上層]長尺シート
天 井	[下層]あらわし(上層床) [上層]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	一部塗装(朱)当初は支輪・木鼻に彩色	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	松、杉、桧等
彫 刻	[外部]水引虹梁(絵様)、木鼻(拳)、支輪(波・植物)、幕股(鳥・植物)、隅木下(象頭)		



写161-8 山門前面



写161-9 仁王様と虹梁



写161-10 隅木下の象頭

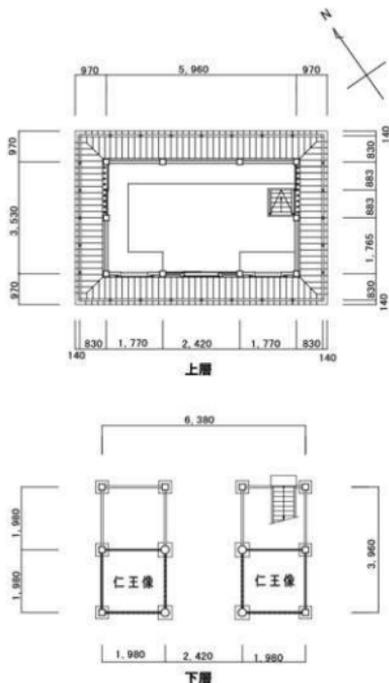


図161-3 平面図(山門)

彫刻は隅木下に特徴ある象頭がある。通常象頭は木鼻の位置にあるのが多いが、本建物の木鼻は拳で作られ、隅木下に象頭がある。

まとめ

本寺院は地元の信仰に守られ地域に根付いた寺院として現在でも親しまれている。規模こそ大きくはないが他に見られない様な遺跡も多く残っている。棟札に残された施主の伝右衛門氏は鹿角村(現桐生市黒保根町)という、いかに広域圏に影響があったということが分かる。

本堂や山門の屋根は鉄板を被せてあるが、当時の草葺屋根の形態を残している。本堂は18世紀初期の地域に根付いた民間寺院建築として、山門は規模や保存状態からしても近郊に類を見ない楼門建築として大変貴重な存在である。

(下山 彰)

【参考文献】

- 『大間々町誌 別巻8 建造物編』旧大間々町 平成5年
- 『市町村別建造物資料 12 みどり市№3』
- 『みどり市の文化財めぐり』

166 正福寺〔しょうふくじ〕

表166-1

寺院名	小平山教光院正福寺	所在地	みどり市大間々町小平768
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 正福寺
主本尊	阿彌陀如来	仏事	厄除け(正月3日)、施餓鬼法要(6月第1日曜日)、除夜の鐘
創立・沿革	明治12年(1879)8月の正福寺明細帳によると、由緒は「創立年曆不詳、貞和五己丑年(1349)大阿闍梨義幸中興開山ス、而メ盛衰ハ其前後共ニ不詳、伝説ニ明和天明ノ年代ニ於テハ盛ニシテ大阿闍梨典翁本堂を再建ヲナシ荏苒トシテ今ニ至ル」とある(「大間々町誌基礎資料XI」より)。		
文化財指定	なし		

位置・配置(図166-1、写166-1)

当寺はみどり市大間々町の街並みから国道122号線を北に向かい、渡良瀬川を福岡大橋で渡り県道塩原小平線を進み、小平の里を過ぎたところの親水公園と県道をまたいで東側の高台に構えている。県道脇には石塔が並び石段を上ると山門(薬門)があり、更に石段を上ると正面に本堂が西向きに建っている。本堂に向かって右には鐘楼、左には庫裏と蔵がある。庫裏の裏には小さな池があり脇の道から裏山に通じている。

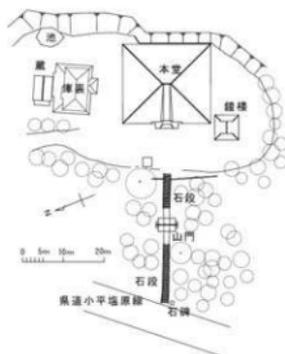


図166-1 配置図



写166-1 境内入口付近

由来および沿革

明治12年(1879)8月の正福寺明細帳によると、由緒は「創立年曆不詳、貞和五己丑年(1349)大阿闍梨義幸中興開山ス、而メ盛衰ハ其前後共ニ不詳、伝説ニ明和天明ノ年代ニ於テハ盛ニシテ大阿闍梨典翁本堂を再建ヲナシ荏苒トシテ今ニ至ル」(「大間々町誌基礎資料XI 大間々町の社寺」)とある。本堂建造当時は大変栄えたようである。絵馬の奉納も多く今回の調査でも19枚(江戸期13枚、明治3枚、不明3枚)を確認した。文化、文政年間が多く一番古いものは文化6年(1809)であった。本尊は阿彌陀如来(秘仏)であるが、口伝によると庵仏殿釈の折に厨子入りの元三大師が日光山より到来したという。鐘織宮、木宮神社、岩穴観音、高倉神社の別当寺である。

本堂(図166-2、表166-2、写166-2~166-7)

本堂は正面9間、側面9間で向拝1間の寄棟造平入である。屋根は茅葺だが、その上に鉄板をかぶせている。茅葺と小屋組の様子は元は縁であった北側の

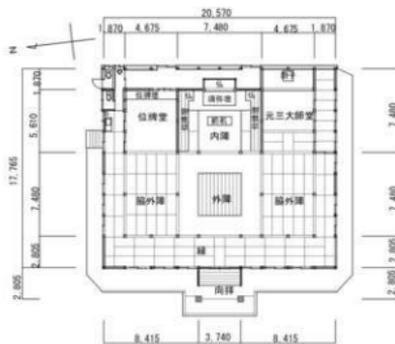


図166-2 平面図(本堂)

表166-2 本堂

建造年代/根拠	明和7年(1770)/古文書	構造・形式	正面20.57m、側面17.76m、寄棟造、平入、向拝1間軒唐破風付、茅葺の上鉄板葺
工	匠 不明	基	礎 自然石、基壇1段、後打コンクリート布基礎
軸	部 [身舎]角柱、丸柱(来迎柱、内外障境柱)、台輪、内法長押 [向拝]角柱(几帳面)、水引虹梁、海老虹梁	組	物 [身舎外部]舟肘木、[身舎内部]出組 [向拝]出三斗変形
中	備 [内外障境]幕段	軒	[身舎]二軒疎垂木 [向拝]打越垂木曲付、茨垂木
妻	飾 [軒唐破風]太瓶束髪型	柱間装置	引違格子戸、アルミサッシ
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張、畳敷
天井	[内陣・外陣]格天井(格間に彩色画)、天井支輪(彫刻)	須弥壇・厨子・宮殿	
塗	装 素木、極彩色(欄間彫刻、天井画)、朱(水引虹梁、繫虹梁、海老虹梁)、黒(水引虹梁唐草絵様、向拝垂木、天井格子)	飾金物等	なし
絵	画 [内陣]格間天井画(紋様)明治31年、墨書 [外陣]格間天井画(龍、虎、靈獣、花鳥)落款	材	質 杉、松
彫	刻 [身舎]外陣 欄間15枚、高肉透し彫(獅子・牡丹、龍、天女、阿吽の鶴・松竹梅、阿吽の鳳凰・桐、阿吽の孔雀・松竹、阿吽の金鶏・芙蓉、など)、内外陣 天井板支輪支輪・幕段(彫刻)、水引虹梁・繫虹梁(唐草絵様) [向拝]木鼻(獅子、象)、手扶(牡丹龍彫)、兔毛通(麒麟)、軒唐破風大瓶束髪型の鐙(彫刻)、水引虹梁(唐草絵様浮彫)、海老虹梁(唐草絵様)、実肘木(絵様)		



写166-2 全景



写166-3 向拝 木鼻 茨垂木



写166-4 向拝 手扶



写166-5 外障



写166-6 外陣入口



写166-7 内、外障境 彫刻欄間

部屋から見る事ができる。軒は二軒疎垂木である。

向拝部分は軒唐破風になっており、茨垂木である。手扶が大きく、打越垂木の勾配が直線ではなく曲線になっている。水引虹梁、海老虹梁とも彫刻は唐草絵様であり、朱に塗られて唐草部分は黒である。海老虹梁も比較的なだからである。水引虹梁などは明らかに他の部材と年代が違う様にもみえるが、本堂建造時の図面にも向拝部分はあったようなので後補でないと思われる。手扶も大きく或は転用の可能

性も考えられる。木鼻は正面が獅子で側面は象で目には銅板が釘止めされている。

平面は6室構成で当初は念仏の為に廊下が四方に回っていたという。外陣には四方にめぐる極彩色の高肉透彫の欄間が内陣側を除き両面に施されている。天井は内陣、外陣ともに格天井に天井画が描かれている。

内陣の天井画は紋様で、明治31年(1898)寄付者と大工、彩色者(吉池平吉)の名の墨書がある。外陣

の天井画は72面に龍、虎、靈獣、花鳥が描かれ、中央の鏡板は迎龍で「山回」の落款がある。極彩色で大変美しく、さらに天井の周りには極彩色彫刻板支輪があり、欄間、支輪、組物、天井が調和している。

本堂建造年は棟札が不明であるが、表紙に「明和七年(1770) 小平村 本堂建立覚帳 寅正月日 正福寺」と書かれた古文書が残されている。そこには寺の規模、材料(柱(杉)、貫、緑繫虹梁、垂木、松丸太、緑板、小根太、金物などの寸法、数、人足の数、手間代、欄間(数)、須弥壇(徑)など代金も含めて、細かく書かれているので建造年代と推定できるであろう。

鐘楼(図166-3、表166-3、写166-8~166-10)

正面側面共1間で入母屋造平入、以前は茅葺であったが平成になって瓦葺にしたという。注目できるのは葦股で、内法貫の上と台輪の上と2段に施されている。下部は簡素な形で中をくりぬいてある。上部は下と同じ火灯曲線の形で中に、四方で異なる草花が内外に彫刻されていて、清楚な感じである。内側は面からはみ出していないが、外側は少し出ている。梵鐘は戦時中に供出したので、昭和40年(1965)に新調された。供出されたとき軽くなって建物のバランスが悪くならないように下に鍾をしい



図166-3 平面図(鐘楼)

表166-3 鐘楼

建造年代/根拠	19世紀前期/古文書、建築様式	構造・形式	正面3.02m、側面2.76m、入母屋造、瓦葺(当初茅葺)
工	匠 不明	基	礎 自然石
軸	部 角柱、台輪、内法貫	組	物 出三斗
中	備 葦股(彫刻、草花)	軒	二軒繫垂木
妻	飾 漆喰塗、懸魚	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・監障子	擬宝珠高欄	床	[下層]土間 [上層]板張
天	井 合板	須弥壇・厨子・宮殿	なし
装	素木	飾 金 物 等	木口金具(隅木先端)
絵	画 なし	材	質 樺、他
彫	刻 木鼻・隅木(唐草絵様)、葦股(透彫)、葦股(草花)		



写166-8 正面



写166-9 内部 梵鐘 葦股



写166-10 上部葦股

たという。

鐘楼建造年代は本堂と同じころとも思われていたが、明治36年(1903)の「寺院所有物明細帳」があり、「由緒 文化年中 諷海法印建立」と記載されていた。木鼻の唐草絵様、裏股の火灯曲線と裏股の彫刻が面から突出していないことから諷海住職の頃(19世紀前期)と推定する。

山門 (図166-4、表166-4、写166-11~166-13)

1間1戸の薬医門で丸柱2本、控角柱2本、冠木

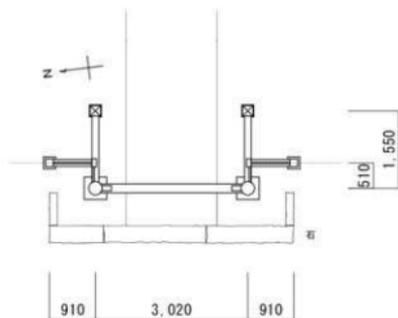


図166-4 平面図(山門)

表166-4 山門

建造年代/根拠	19世紀前期/古文書	構造・形式	1間1戸薬医門(3.02m)、側面1間(1.55m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 礎	コンクリート
軸 部	丸柱、角柱(控柱)、冠木長押	組 物	出三斗
中 備	斗拱	軒	一軒葺垂木
妻 飾	虹梁裏股、懸魚鰭付、桁隠	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・籠障子	なし	床	なし
天	井 鏡天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗	素木、朱(虹梁、袖内側の破風板)	飾 金 物 等	なし
絵	画 なし	材 質	樺
彫	刻 虹梁(唐草絵様浮彫)、木鼻(拳)、懸魚・桁隠(彫刻、菊花)、裏股		



写166-11 正面



写166-12 虹梁 組物



写166-13 側面 妻飾

などで構成される。切妻造平入の瓦葺である。昭和20年(1945)7月に瓦が大破損して修理した記録が残っている。平成27年(2015)にも瓦の葺替と修理をしている。

懸魚、桁隠に彫刻が施されていて、水引虹梁は浮彫で下側を朱で塗っている。梁に「大學校ノ門 上州山田群 小平村」と墨書があるというが肉眼では確認できなかった。

建造年代は鐘楼と同様に明治36年(1903)の「寺院所有物明細帳」に記載があることと材料の仕様と劣化状態から、諷海住職の頃(19世紀前期)と推定する。

まとめ

当寺は、嵯峨宮、木宮神社、岩穴観音、高倉神社の別当寺であり、隆盛した時代を過ぎてもなお、旧小平村で重要なお寺である。嵯峨宮の建造年は再建棟札によると寛保3年(1743)であり、当寺本堂建立と同じく典翁住職の代である。木宮神社は少し後になり、建造年は棟札によると文化4年(1807)となっている。正福寺は明和7年(1770)なので、両神社のちょうど中間あたりの建造年である。嵯峨宮は武州妻沼の大工 林兵庫藤原正清による。典翁住職の出身は武州なので、林兵庫を頼んだのは、その関係か

とも言われている。木宮神社の大工は当地に近い山田郡上仁田山の小金井直七、彫工は星野甚内であり、彫刻は時代を反映して、鯉鱈宮に比べ地紋彫りや羽目板彫刻など多用している。木宮神社建造時は謀海住職の代で正福寺の鐘樓、山門も建造している(因みに謀海住職も武州の出身であるという)。正福寺は年代、場所、地位などで中心に存在する。両神社共棟札が残っていて建造年、工匠がわかっているのに、中心たる正福寺に見つからないのは大変残念であるが、鯉鱈宮から正福寺さらに木宮神社と当地の社寺建築や彫刻の流れを語るうえで大変重要な建物である。人は初めて一歩内部に入った時には、その豪華さに驚くだろう。工匠、彫刻師など不明なこともあるが、お寺の魅力や価値はそれだけではない。

(板川多恵子)

【参考文献】

- 『大間々町誌 別巻8 大間々町の建造物』大間々町誌刊行委員会 平成5年
 『大間々町誌「基礎資料XI」大間々の社寺』大間々町誌刊行委員会 平成9年
 『本堂建立覚帳』小平村正福寺 明和7年
 『寺院所有物明細帳』山田郡福岡村大字小平村正福寺 明治36年